

Title	安南訳語の研究(三)
Sub Title	A bibliographical and linguistic study on the "An-nan-yi-yu" (安南訳語)(III)
Author	陳, 荊和(Chen, Ching-Ho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.1 (1967. 7) ,p.25- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19670700-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安南訳語の研究 (三)

陳 荊 和

第二章 訳語の解釈

本文では安南訳語の精確なテキストを得るため、校合には阿波国本を底本とし、其他の六種の伝本を全部参照した。各本の安南訳語は一律に内容を天文・地理・時令・花木・鳥獸・宮室・器用・人物・人事・身体・衣服・飲食・珍宝・文史・声色・数目及び通用の十七門に分け、各門配置の順序も同一である。唯倫敦本は巻頭に安南訳語目録として各門の名称を列挙している。

各本に見える語数は河内本・内藤本・阿波国本及び倫敦本は同じく七一六語である。近藤本は鳥獸門で「狐狸」(No. 283), 「叫鴉」(No. 284) 及び「黒馬」(No. 293) の三語を欠き、その排列も阿波国本に比べると若干の異同があり、誤字も比較的に目立つ。その原因の一つは近藤正斎全集刊行の際校正の不注意に帰せられよう。静嘉堂本は飲食門末尾の九語 (Nos. 611-619) 及び珍宝門の殆ど全部を占める二八語 (Nos. 620-647) が逸脱して居り、これも伝抄の際の疎漏に由るものと思われる。最後に玄覽堂本は上述の如く、各門にて若干の語順の相異・欠字或は附加が認められ、又他の六本では単独の文字となつている訳語を二字ずつ連結する個処も可成りあり、全体の語数は七一一語に減少しているが、かかる現象は矢張り抄録の際の錯誤に由るものと見做すべく、原來は他の訳語同様七一六語あつたと考えられる。

安南訳語記載の体裁は丙類に属する他の訳語と同じく上下両段に分ち、上段は漢字を以て語義を示し、下段は同じく漢字を以て上段の語義に該当する越語の語音を表明している。併し越語の声母や韻母は漢語とは可成り相異している上に、かゝる標音の方法は云わば中国古代の「読若」又は「読如」に等しいものであるので、これによつて編者の表現せんとする越語音の近似音は得られるけれども、精確な音韻を表現することは望むべくもない。要するに、上下両段の漢字の音と義の相互關聯により（上段の漢字からは義を採り、下段の漢字からは音を採る）、読者は編者が表明せんとする越語音を推考することが出来る仕組となつてゐる。故に、本訳語の研究は一面に於て音義共に妥當な越語音を再現することが出来、他面に於て註音に用いられた漢字の具体的な応用の情況が明らかとなる。前者の成果を比較検討することにより、更に訳語編成当時の越語の声母の概況や語法の一斑を窺い知ることが出来、後者と越語音の關聯によつて同一時代に於ける漢語音韻の状態をも推測することが出来る。併し十五・六世紀に於ける漢語音韻の研究は本訳語以外に他種の華夷訳語及び其他数多の資料文献を参考する要があり、又本訳語の音注が「読若」又は「読如」の性格を有するに止まることに鑑み、かゝる方法で余り行き過ぎた論考は差控えるべきであるので、本文論考の対象は専ら前者の越語の研究に限定し、後者に關しては音註に用いられた漢字と越語音の分類対照表を製成して漢語音韻学研究家の参考と検索の便に供するに止める。

次に訳語の中で使用された音註漢字の音値に就ても筆者は本文が採つた立場を明らかにせねばならない。按ずるに音註として使用された漢字的的確な音値を把握出来るか否かは訳語解釈の成敗の關鍵であるとも云うべく、その重要性は無視出来ない。嚴密に云つて、本訳語の總ての語例に就て全盤的且つ綜合的検討を加え、且つ推定された越語音とも比較しない限り、訳語の音註が如何なる時代或は如何なる地方の音に従つたのか断言出来ない筈である。所が上述の如く、本訳語の編修年代は十五世紀の末年から十六世紀の初頭であり、その編者も会同館の官吏と推考されるので、音註の音も一応明代官話音であつたと考えて差支えない。事實上、浅井恵倫教授が日本訳語に就て考察した所では同訳語の音註の大部分は

北京及び南京官話音に従つて居り、又田坂興道氏はその著の「回回館訳語」語釈の中で音註漢字応用の情況と傍注された回回文字の双方を参照して、回回訳語の音註は何れも北京音に従つてゐることを明らかにした。⁽²⁾

かゝる諸先学の見解は大體に於て妥当であるとは云え、当時の官話音の音韻組織と現代官話音の間には細部に亘つて可成り異なる点も存することを注意する必要がある。所謂初期官話音に関する研究材料としては元代、江西高安の人たる周徳清の中原音韻（四卷）が第一に挙げられるが、この書は元代詞曲（北曲）の押韻字五八七六字を収録し、これを十九の韻類に分類し、各韻類を更に陰平・陽平・上・去の四声に分ちてゐる。その依拠した材料が当時の通俗文学であつた、ゆゑ忠実に当時の北方共通語たる初期官話の体系を表現して居り、これにより、十四世紀当時華北・華中地域にて今日の官話に似た共通語の音韻体系が出現したことがわかる。更に周氏が古来の韻書の伝統的な方法に囚われず、従来の入声を平・上・去の三声に配置したことによつて、当時の初期官話の入声は既に消失、又は消失の過程にあると見なされる。今中原音韻を現代官話音の韻書たる中華新韻（民國十五年、國民政府公佈）と対照すると、次の如き主な特徴が認められる。

- (1) 中原音韻の七真文と十七侵尋の二韻が中華新韻では十五痕韻一つにまとまり、前者の八塞山、九桓歛、十先天、十八監咸及び十九廉纖の諸韻が後者では十四寒韻一つにまとまり、前者の *em, iem, am, iam, iem* 等の韻尾が後者では一律に *-n* の韻尾に変じてゐる。

- (2) 前者の *k, k', x* 諸母の細音が未だに顎音化 (Palatalisé) してゐる。

- (3) 一般的に云つて、前者にては濁音の消失が認められる、但し擦濁音 *v* は尚存してゐる。

- (4) 前者の *p, p', m, f, t, t', l, n* の諸母が現官話音と同じである。⁽³⁾

明初には官撰の洪武正韻が編修されたが、これは所謂「中原雅音」の影響を受け、伝統的な韻書を根拠とし、而も修輯に参加せる人々は殆どが南方人であつたので、その結果周氏の中原音韻とは大分異なるものとなつた。例えば、^(a)声調は

平・上・去・入に分け、平声は陰陽を区別せず、⑥入声の文字は独立して十個の韻類となり、各陽声韻と配合し、明らかに韻尾は *-k*, *-p*, 及び *-t* の区別があり、㉟声母は二十一類あり、濁塞音・濁擦音及び濁擦音があり、現代の呉語に似る。これらの諸点から董同龢氏は洪武正韻は当時の官話音の実際に即したのではなく、故意に旧来の韻書に適應せしめて編修されたのでなければ、その表現する所の音韻は当時の南方官話音ならんと見ている。⁽⁴⁾

更に正統七年(1442)に至り蘭茂(廷秀)の韻略易通が出た。これは明らかに当時の口語を反映せる韻書で、声母を二十韻に分け、その系統は中原音韻と同じである。只入声字は前の十個の陽声韻に附せられて居り、系統は洪武正韻に近くこの点は実際の語音に合わない⁽⁵⁾と見られている。

以上の諸点を総合すると、十五世紀中葉の官話音は元代の中原音韻の音韻系統とさして変らぬことが推察されるが、筆者が本訳語を考釈して実際に体験した所では、大体中原音韻の音値を以て安南訳語の大多数の語の解釈がつくと云うことである。殊に官話音と越語音間に於ける声母や *ɿ* 韻尾の合致が注目される。更に注意すべきことは共通語乃至は標準語としての官話なるものはこれを話す当地人によつて地方的・個人的偏差が著しいことである。華北・華中の極く一部を除いた中国各地方の官吏乃至は知識階級は地方によつて多少の程度の差異はあるが、従来多かれ少かれ両言語共用的な習慣になじんでいる。具体的に云うと、官界にて、又は公用語として官話を使用するが、私的な場合又は家庭では依然としてその地方の方言を操っている。かゝる *bi-lingualism* は特に呉語(蘇州語・上海語)・客家語・閩南語(福建語)及び広東語を地方語となす社会に於て著しい。これらの地方語は尚古代漢語の要素を可成り残存して居り、一般的に云つて *b*, *ɿ* 等の濁音声母や *-k*, *-p*, *-t* の韻尾を有する入声を保持する以外に、蘇州・福州・広州の方言では *m*, *n*, *ŋ* が単独の音節として用いられ、厦門方言になると、単独の *m* (姆)・*ŋ* (黄) 以外に更に *h* (*hm* 媒)・*p* (*ps* 方)・*t* (*ts* 𪗇)・*k* (*ks* 光)・*ts* (*tsɿ* 莊) と直接拼音する所謂韻化輔音も存している。⁽⁶⁾ かゝる先天的な方言の特徴は華南地方の人士が

官話を話す際、或は詩文を書く場合には随時出現し、地方色豊かな、お国訛の官話となることが多い。

今本訳話に於ける音註のあて方を見るに、入声韻尾 *-c*, *-ch*, *-p*, *-t* を有する越語に対しては多くの場合入声の漢字が使用されて居り、又上述の如く、官話音と越語音の *v*- 声母や *h*- 韻尾の合致も著しい。この点から見て、本訳話の編者は中原音韻又は洪武正韻の如き官話系統の韻書を参考にした華北人か、又は明代官話をはなす華南人であつたと推考される。

以上の諸点に鑑みて、本文では訳語に見える各語例の語義の部份は中国民間に通用する官話の語義に従い、又音註は中原音韻の音値に準拠した。幸い国際音標による中原音韻の音註が台湾淡江文理学院の許世瑛・劉徳智両氏によつて完成されて民国五十三年(1964)台北の広文書局から出版されているので、本文での越語音の勘考にはこれに従うこととし、必要な場合にはカールグレンの「漢音及び日本漢音分析辞典」(B. Karlgren, *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*) 所載の近代官話音及び古代漢音 (*Ancient Chinese*) をも併せて参考することにした。

凡 例

- (1) 最初の数字は本訳話に於ける語例の順序を示す番号であり、一律に阿波国本の順序に従つた。
- (2) 第一節の漢字は語義を示し、次節の漢字は音註であつて、その傍に附せられた括弧内の音標は音註の音値を示す。第三節は筆者が推考した越語音で、現行の「国語字」(*chū guó-cngū*) で標出した。それが明らかに中古音である場合はその傍に近代越語音を、又越読音である場合は *SV* の両字を、夫々括弧で附加した。
- (3) 第一節又は第二節で各テキストの間に異文がある場合は、阿波国本以外の諸本の所載を列挙して論考の便に供した。例へば、

No. 524 閉眼 雑干言 (静本、近本、倫本) 雑干言
(玄本) 雑干慢

の場合、異文の項に列挙されていない河本(河内本)と内本(内藤本)の所載は底本の阿波国本と同文である。

(4) 二個処以上或は二種類以上の用例のある音註は初例にてその用例を悉く列挙して応用の情況を明らかにし、その音値は初例にて表示するが、次例以下は省略した。

(5) 同音の音註が二つ以上ある場合はその古代漢音を対比して、韻母又は韻尾が比較的越語音に近いものを探った。特に底本と玄覽堂本が音註に採用した漢字が同音異文である場合は原則として底本の音註を採ることとした。

(6) 音註が越読と越俗音の双方に解釈される場合は原則として越読音をとり、俗音を附註した。蓋し、かゝる場合の俗音は殆どが越読音の変訛(variant)であることに由る。

(7) 本文で採用した縮写並びに符号は次の如くである。

阿本…阿波国本。

河本…河内本。

内本…内藤本。

近本…近藤本。

静本…静嘉堂本。

倫本…倫敦本。

玄本…玄覽堂本。

交稿…陳孚(剛中)の交州藁。

Dict.: Alexandre de Rhodes の Dictionarium.

享保訳語…享保十三年(1728)来日せる象使いの越南人が話した語彙(近藤正斎全集卷一所載)。

天明訳語…天明七年(1787)日本に漂流せる越南人の語彙(同上)。

寛政訳語…寛政甲寅年(1794)漂民始末方言条所載の語彙(同上)。

EM: 初期官話音(中原音韻)。

MM: 近代官話音(Karlgren)。

AC : 古代漢音。

SV : 越諺音 (Sino-Vietnamien)。

QN : 現行の「國語字」。

CN : 字喃。

A→B : A 變じて B となる。

A>B : A は B より古。

* : 古音符号。

(8) 官話音を表記するに當つて、カールグレンの方式と寛式國際音標・仏蘭西遠東學院方式及びウエーテ式 (Wade system) の間には可成りの差異がある。以下中國現行の注音符號に準據して、四方式の相異なる部份を列挙する。

(注音符號)	(Karlgren)	(寛式國際音標)	(FFEO)	(Wade)
ㄉ	ɳ	x	h	h
ㄌ	ki, tsi,	tsi,	tsi,	chi,
ㄎ	k'i, ts'i,	ts'i,	ts'i,	ch'i,
ㄊ	hi, h-	si,	h,	hsi,
ㄗ	ts'i, ts'-,	ts,	tche, tch-	chih, ch-
ㄘ	ts'i, ts'-,	ts'	tch'e, tch'-,	ch'ih, ch'-,
ㄑ	si, s-	s,	che, ch-	shih, sh-
ㄒ	zi, z-	z,	je, j-	jih, ji,
ㄓ	tsi, ts-	tɕ,	tsɛu, ts-	tzü, ts-
ㄔ	ts'i, ts'-,	tɕ',	ts'ɛu, ts'-,	tzü', ts'-,
ㄒ	si, s-	ɕ,	ssɛu, s-	ssu, s-

l	i, ji-	i,	yi, -i,	i,
x	u,	u,	wu, w-, -ou,	wu, -u,
l	ü,	y,	yu, -u,	yi, -ü,
z	o, -ə,	e,	ngo, -ö-, -o,	ê,
z	e,	e,	ie,	eh,
ʃ	ai,	ai,	ngai, -ai,	ai,
z	au,	au,	ngao, -ao,	ao,
x	ou,	ou,	ngeou, -eou,	ou,
ʃ	an,	an,	ngan, -an,	an,
l	an,	en,	ngen, -en,	ên,
ʃ	ang,	aŋ,	ngang, -ang,	ang,
z	ang,	aŋ,	eng,	êng,
l	er,	er,	eul,	êrh,

附 註

- (1) 浅井惠倫、上引論文、頁一七。
- (2) 田坂興道、上引論文、頁一一。
- (3) 董同龢、中国語音史、現代国民基本知識叢書第二輯、頁二二—三四。
- (4) 同上、上引書、頁三四—三六。
- (5) 同上、上引書、頁三六—三七。
- (6) 羅常培、漢語音韻學導論、北京、一九六二年、頁五九。

A 天文門 (Nos. 1—52)

1 天 雷 (Luei; MM lei); (玄本) 雷音勒 (lei) *blò'i (trò'i)

近代越語で「天」を意味する語は tròi (又は giò'i) であるが、Mường 語は tròi であり、Dict は blò'i となっている。「雷」は本例及び Nos. 12, 13, 18-26, 303, 669 について *blò'i を表記する一方、No. 467 について「退く」義の lui' No. 492 について「舌」の義の lu'ò'i を表記する。

2 日 靄 (ai); (玄本) 靄音額 (ai) ngày

「靄」は本例及び Nos. 32-36, 136-140, 162-174 について暦上の「日」である ngày の音注となっている。但し本例は「太陽」を指す。

3 月 燙; (玄本) 物^(MM u)_(AC minet) nguyệt (SV)

諸本の「燙」(t'an) は明らかに暦上の「月」である thàng を表わすが、本例は天体の月を指すのであるから、玄本の「物」を音註に採用して、「月」の SV たる nguyệt を表わすと解した方が妥当である。本例以外に、Nos. 14, 15, 37-39 諸例の月は同じく天体の月を指すのであるが、玄本は一律に「月」を音註として nguyệt を表明している。

4 星 抄; (近本、倫本) 抄 (t'sau) sao

音註は「抄」が正しい。「抄」は本例以外に、Nos. 40-43 について同音を表わす。天明訳語は「シヤウ」と訳す。

5 風 教 (EM kau; MM kiau) gió

「教」は本例以外に、Nos. 10, 45-47 について同音を表わす。交稿も「風」に対する音註として同じく「教」をあててい

る。天明訳語で「ホン」をあてるのは「風」の SV たる *phong* を表明したのである。

6 雲 梅 (*mei*)*mây*

「梅」は本例以外に、Nos. 16, 17, 27-31 諸例にて同音の音註となる。交稿も「雲」に対する音註として「梅」をあてている。天明訳語に「ノイ」をあてるのは「メイ」の誤伝であろう。「梅」は別に No. 273 にて蚊の義の *muôi* (Nos. 287, 491, 513, 515 及び *múi* (鼻) / No. 504 及び *môi* (唇) の音註となつてゐる。

7 雨 表 (*MM mo*); (玄本) 墨*mưa*

「表」と「墨」(*mo*) は同音なれども、玄本の「墨」の用例は領る統一性を欠くから、諸本の「表」を音註に採用する。「表」は本例及び Nos. 11, 48-52, 563 にて同音を表わし、別に、No. 146 及び *vừa* (昨、今しがた) / Nos. 236, 523, 525 及び *mó* (開ける) / No. 583 及び *mật* (蜜の SV) / No. 705 及び *mật* (密の SV) の音註となる。「雨」に対して天明訳語は「モヤ」、寛政訳語は「モヲ」をあてる。

8 雷 滲 (*Sam*); (玄本) 靱*sâm*

玄本が「靱」(*hi*) をあてるのは「雷」の SV たる *loi* を表わさんとしたものらしいが、本例では「滲」を以て俗語の *sâm* を表わすと解するのが合理的であろう。「滲」は本例以外に、Nos. 155, 169, 683 及び **sâm* (◇*tâm*: 数詞「八」) の音註となつてゐる。

9 露 末; (河本、倫本、静本) 末

(玄本) 莫 (*mo*)*móc*

越語で「露」に相当する語は *suong* 又は *móc* であり、「露滴」は *hạt suong* 又は *hạt móc* と称する。本例の音註を見るに、阿本、近本、内本の「末」に対して、河本、倫本、静本は「末」、玄本は「莫」をあてる。これによつて、音註は「末」又は「莫」を採らねばならぬこと、同時にこれが *móc* を表わすことが判明する。而して、「末」、「莫」両

字の内、「莫」の AC は *māk* であるから、本例の音註としては「莫」を採用した方が、「末」の如く、「末」と混同しやすい字を使用するよりも妥当であろう。Gaspardone 氏は「末」を採用して *mù* と解するが、これは「霧」のことである。「莫」は本例以外に、No. 335 にて *măc* (墨の SV) を表わす。

10 風吹 教退 (*kau t'uei*) *gio thòi*

「退」は本例及び No. 614 にて「吹く」義の *thòi* を表わす。字喃は「退」に作り、同じく「退」を声符に採用して *no*。

11 雨下 麦得; (*玄本*) 墨沙 (*mo sa*) *mura xá*

「得」は Nos. 21, 71 にて *duói* (下に) を表わすが、本例の「下」は「降る」と云う動詞であるから「得」(*duói*) をあてる訳には行かない。Gaspardone 氏は「得」を *té* の音註と見て、本例を *mura té* と解したが、*té* は水が「はげける」義で雨が降る場合には用いられない。幸にして玄本が音註として「墨沙」をあてているので、「沙」は *xá* (降り注ぐ) の音註とみて、*mura xá* を解すべきである。故に本例の音註としては、両方の音注を折衷して「麦沙」となすべきであろう。「沙」は別に No. 584 にて鮓(水母)の義の *súa* を表わしている。

12 日出 靄末; (*静本、倫本、内本、河本*) 靄末 (*玄本*) 雷木 (*luei mu*) 音額末 **blò'i (tròi) móc*

本例の「日出」は太陽が出ることであるから、諸本のように「靄末」とあてて *ngày móc* (*ngày* は曆上の日) と読ませるよりも、玄本のように「雷木」(「木」の AC は *muk*) とあてて **blò'i móc* と解する方が合理的であり、事実上 *tròi* (*^*blò'i*) *móc* なる表現は現在でも日常会話で使用される。要するに、音註としては「靄末」は誤りであるが、「靄末」と「雷木」では後者の方が越語の語法に比較的かなって居り、これを採るべきである。

13 日落 靄吝; (*玄本*) 雷吝 (*luei lian*) **blò'i (tròi) lán*

本例は No. 12 同様、「靄吝」を採つて *ngây lán* と読むよりも、玄本に従つて、「雷吝」を **blò'i lán* と解した方が合理的である。 *lán* には「沈下する」・「潜入する」・「太陽又は月が傾没する」等の義がある。「吝」は本例以外に、Nos. 15, 41, 81 にて同音の音註となる。

14 月出 燙末; (玄本) 月末 (*ye mo*)nguyệt (SV) *mọc*

本例の月は天体の月であるから、「燙」(*thàng*; 曆上の月)を音註とするよりも、玄本の如く「月」(*AC ngiwat*)をあつ、その SV の *nguyêt* を表わしたと見た方がより合理的であろう。Gaspardone 氏は本例の「燙」を **thàng* と解するが、No. 3 の月―燙には *thàng* をあつ、前後矛盾している。「末」は本例以外に、No. 40 で同音、No. 115 では *mâu* (戊の SV)・No. 161 では *mát* (末の SV)・No. 475 では *mua* (買ぐ) の音註となる。

15 月落 燙吝; (玄本) 月吝

nguyệt (SV) *lăn*

上例 (No. 14) と同じく、本例の「燙」(*t'àng*) を Gaspardone 氏は **tlàng* と解するが、Dict. では「月」は *blang* であつて **ti-* の形はないから、かかる解釈は無理であろう。

16 有雲 箇梅 (*ko mei*); (玄本) ケ梅*có mây*

「箇」(ケ) は本例及び Nos. 17, 51, 52, 456, 457 にて *có* (有する、ある) の音註となる。

17 無雲 張箇梅 (*t'iaŋ ko mei*); (玄本) 張ケ梅*chàng có mây*

「張箇(ケ)」は本例及び Nos. 52, 457 にて否定詞 *chàng (có)* を表わす。交稿も否定詞 *chàng* に矢張り「張」をあつてゐる。

18 天晴 雷旦 (*luei tan*); (玄本) 雷蕩**blò'i (trò'i) tành (SV)*

tành (晴の SV) の音註として諸本の「旦」(*tan*) と玄本の「蕩」(*tan*) があるが、双方とも音註的には左程ちがはな

い。但し玄本は No. 106 では「当」を以て同音を表わして居り、用例に於て統一を欠くから、音註としては「且」をとる。「且」は No. 106 で同音を表わし、別に No. 357 及び *tân* (傘の SV) No. 509 及び *đăm* (胆の SV) の音註となる。

19 天陰

雷対 (*luei tuei*)

**blòì* (*tròì*) *tòì*

越語で「曇る(陰)」、「暗くなる」、「晚くなる」の諸義は何れも *tòì* である。「対」は「陰」(曇る)の意味では本例と No. 105 で同音を表わし、Nos. 23, 101, 598 及び「晚くなる」義の *tòì* を表わし、別に Nos. 174, 175 及び *đôi* (対の SV) No. 198 及び *tôi* (蒜) (ととく) No. 238 及び *đôi* (戴く) No. 617 及び *đôi* (餓) No. 646 及び *đó* (倒) (注ぐ) の音註となる。

20 天上

雷連: (玄本) 連雷 (*lien luei*)

**tlên* (*trên*) **blòì* (*tròì*)

副詞「上に」を指す近代越語は *trên* で、複輔音 tr- は北圻では殆ど捲舌音化して *fs-* となつて居るが、Dict. では *tlên* に表わされ、明らかに十七世紀中葉まで流動音の音素を保持していたことがわかる。「連」はこの中古越語音を表わしたのに外ならない。更に音註の語順は諸本はこれを漢文式に「雷連」となすが、玄本は逆に「連雷」となし、越語の語法に従つて居る。「連」は本例及び No. 70 及び同音を表わし、別に Nos. 82, 328, 661 及び **tlên* (動詞「上る」) の音註となる。

21 天下

靄得: (玄本) 得雷 (*tei luei*)

đuóì **blòì* (*tròì*)

越語で「下」又は「下に」相当する語は *đuóì* を描くは考えられないので「得」はその音註にちがひなく。「得」(*tei, te; AC tak*) の用例は頗る広範囲に亘り、本例及び No. 71 及び *đuóì* を表わす外、別に No. 53 及び *đât* (地) No. 64 及び *đât* (十) No. 69 及び *tháp* (低く) No. 249 及び *dê* (半) No. 298 及び *thét* (断く) No. 333 及び

し dich (笛の SV) No. 342 じし dia (磔 卅) No. 353 じし tên (箭 矢) No. 468 じし đũa (送^送) Nos. 558, 691 じし tây (西の SV) の音註となつてゐる。本例の音註の語順は玄本の「得雷」が正しい。

22 天曉 雷元 (EM Luei K'ang) (MM lei xang); (近本) 雷元 *blò'i (trò'i) hù'ng

越語で「曉」又は「夜が明ける」に相当する語は hù'ng であるから、「元」がその音註であり、近本の「元」は誤伝であることは明らかである。これに対して、Gaspardone 氏は「元」を採用して ràng と解するのは不可解である。

23 天晩 雷対 *blò'i (trò'i) tòi

24 青天 蒼雷; (玄本) 雷蒼 (Luei ts'ang) *blò'i (trò'i) xanh

音註の語順は玄本の方が正しく、「蒼」は本例及び Nos. 27, 75, 291, 557, 662, 669 じし xanh (青^青) を表明する。

25 黄天 罔雷; (倫本) 罔雷 (Luei vay) *blò'i (trò'i) vàng

越語で形容詞「黄い」も名詞「金」も共に vàng である。その音註としては勿論「罔」を採るべく、又語順も玄本の方が正しい。「罔」は本例及び Nos. 29, 220, 294, 603, 666 じし 形容詞「黄^黄」義の vàng' 更に Nos. 426, 620, 630, 632-636, 644, 646, 670 じし 名詞「金」の義の vàng を表記する。

26 敬天 禁雷 (EM kiam Luei) (MM kin lei) kình (SV) *blò'i (trò'i)

「禁」は本例及び No. 463 じし kình (敬の SV) を表わす。

27 青雲 蒼梅; (玄本) 梅蒼 mây xanh

28 白雲 八梅; (玄本) 梅八 (mei pa) mây bạch (SV)

形容詞「白^白」に相当する越語は trắng (*tiàng) 又は「白」の SV たる bạch である。「八」(AC pwat) は本

例及び Nos. 234, 292, 305, 556, 565, 604, 608, 638, 665, 675 及び bach を表わし、別々 Nos. 394, 395 及び bá (伯の SV) No. 553 及び vá (榘、くへんくへん) の音註となる。

29 黄雲 罔梅; (玄本) 雷罔 *mây vàng*

玄本の「雷罔」は明らかに抄写の際の筆誤で、音註としては「梅罔」が正しい。

30 紅雲 鐸梅; (玄本) 梅鐸 (*mei to*) *mây đỏ*

「紅」義の越語は *đỏ* であるから、「鐸」はその音註にはちちわしう。「鐸」は本例及び No. 233, 235, 663, 671, 672 について同音を表わす。玄本は No. 233 及び「奪」(*tió*) をあてる外、各例では「鐸」をあてているので、本文では一律に「鐸」に従うことにする。「鐸」(AC *dâk*) は別々 No. 195 及び *tâu* (槽の SV) No. 338 及び *độc* (贖の SV) No. 344 及び *đuá* (筋一審の SV) Nos. 418, 531 及び *tôt* (善、良) No. 601 及び *đâu* (豆の SV) の音註となる。

31 黒雲 忍梅 (EM *zian mei*); (玄本) 梅端 *mây đen*

「黒」義の越語は *đen* であるから、「忍」はその音註であると思われる。明代官話音では既に塞濁音の *đ* (*đ*) が喪失しているから齒濁音の *z* (*z*) を以て註音したのであろう。玄本の「梅端」は語順としては正しいが、「端」(*tuán*) を *đen* と解するのはちちわか無理であり、且つ玄本は本例以外の各例にも「忍」を採用しているので、本例の「端」は取らなう。「忍」は本例以外に、Nos. 293, 667, 673 について同音を表わし、又 No. 119 及び *nhâm* (甘の SV) No. 571 及び *giâm* (醋) の音註となる。

32 日長 靄倭 (委) (*ai uei*) *ngày *yài (dài)*

「長」義の近代越語は QN で *dài* と表記するが、その実際の音値は北圻では *zai*, 南圻は *yai* に近い。音註の「倭」

は「委」の譌とみるべく、中古音の *yai を表わすものと思われる。「委」は本例及び Nos. 177, 431 とし *yai' 別と No. 393, 408, 411, 414-423, 425 とし ngu'oi (人)' No. 446 とし ngoi (坐) の音註とせよ。

33 日短 靄半 (EM ai pon)
(MM ai pan)

ngày vắn

近代越語で vắn は事物の短小なる物を指すが、古代又は中古越語では時間上の短促をも指したるごとし (Genibrel, p. 919)。「半」は本例及び No. 176 と vắn (短) を表わし、別と No. 272 とせ bư'óm (蝶)' No. 316 とせ vắn (板)' No. 341 とせ bát (碗)' No. 474 とせ phân (分の SV)' No. 476 とせ bán (売) の音註とせよ。

34 日中 靄冲 (ai t'iuŋ); (玄本) 靄兀

trung (SV) ngày

「中」に当る近代越語は trong, Dict. は *trung と *tlaó の双方に作る。この間の関係を見るに、*tlaó → trong (中に、内に) が考えられるが、trung は明らかに「中」の SV である。「冲」は本例及び Nos. 597, 693 とし trung (中の SV) を表わす。玄本の兀 (u) の AC は nguət と、或は giũa (半、半) を表わすこととしたのかも知れなうが、併し玄本は No. 693 の「中」に対しても「中」をあてつゝるので、本例では「兀」は採らなう。

35 日斜 靄打 (ai ta); (玄本) 靄菜

ngày tà (SV)

「打」は本例及び No. 706 とし tà (斜の SV) を表わす。玄本は本例では「菜」(ts'ai) をあし、No. 706 とは「打」をあてつゝる。「菜」の対音は見付からない。

36 日暖 靄蔭 (ai iam)

ngày âm

近代越語で「暖」義の語は âm であり、一方「蔭」の EM は iam, AC は iam とあるから音韻的に極めてちがひ。尚 âm は「蔭」の SV でもある。

37 月圓 燙鸞; (玄本) 月朗

nguyệt (SV) *tlôn (trôn)

「円い」義の近代越語は *tiôn* であるが、中古音は **trôn* である。「彎」(*lon*) は本例及び Nos. 539, 715 として *tiôn* の音註となる。又諸本は天体の月と曆上の月に何れも「燙」をあてて紛わらしいから、玄本の如く「月」の音註として「月」(*ye*, AC *ngiwet*) をあて、*nguyêt* (月の SV) を表わすと解した方が正しい。故に本例の音註としては双方を折衷して「月彎」とした方がよい。Gaspardone 氏は本例以下 Nos. 38, 39 の「燙」を何れも *tiàng* と解している。

38 月缺 燙少; (玄本) 月少 (*ye Siau*) *nguyêt* (SV) *thieu* (SV)

上例 (No. 37) と同じ理由で本例の音註は「月少」を採る。「少」は本例及び No. 415 として *thieu* (少の SV) を表わす。

39 月明 燙売; (玄本) 月賞 (*ye Sian*) *nguyêt* (SV) *sang*

「明るい」義の越語は *sang* であるから、玄本の「賞」がその音註であること疑いない。諸本の「売」(*mai*) は *minh* (明の SV) を表わすかとも想像されるが、「賞—*sang*」の方がはるかに適切である。Gaspardone 氏は「燙売」を *tiàng mai* と解するが、*tiàng* は兎も角として、*mai* の方は「明るい」意味とは全然関係がない。

40 星出 抄末 (*tʃ'au mo*); (玄本) 沙末 *sao məc*

玄本の「抄」は「抄」の誤写であろう。

41 星落 抄吝; (玄本) 抄沙 *sao lán*

玄本の「抄沙」は *sao xá* と読めるが、この例は No. 13 「日落—雷吝」と同様 *sao lán* と解した方が無難であろう。

42 星多 抄鈕 (*tʃ'au niou*) *sao nhiều*

「鈕」は本例及び No. 458 として *nhieu* (多) を表わす。Dict. は *nhéo* となす。

43 星少 抄一 (*tʃ'au i*) *sao ít*

「一」は本例及び No. 459 で「少」義の *it* を表わす。字喃は「沙」に作り、「乙」を声符とする。

44 雷霹 滲殺; (玄本) 甚殺 (Siam Sa) *sâm sét*

「甚」と「滲」は同音同声なれども「甚」の方は MM 音で *sem* の音もあるのび、これを以て *sâm* (雷) の音註とする。「甚」は別に Nos. 100, 596 として *sóm* (早) を表わす。「殺」(AC sat) は本例で、*sét* (電撃・霹靂) を表わし、更に Nos. 623, 649 として *sát* (鉄) の音註となる。

45 風大 教憂 (EM kau kuo); (玄本) 教吝憂 *gió cá*

「憂」は本例及び Nos. 48, 49, 87, 89, 90, 433, 438, 439, 533, 540, 671, 700 として *cá* (大きく、巨大な) を表わし、別に No. 387 として *cá* (長老) No. 590 として *cát* (切る、割る) の音註となる。尚玄本の「吝」(*lian*) は *lón* (大きい、巨大な、*cá* と同義) の音註と見なし、「教吝憂」を *gió lón cá* と解して *gió* (風) に *lón* と *cá* の二つの形容詞が付いたものとも考えられるが、玄本は下例 (No. 46) の「風小」に対しても「教吝憂」を充てている点を見ると左様解釈するわけにも行かない。

46 風小 教別 (EM kau pie); (玄本) 教吝蜜 *gió bé*

「別」は本例及び Nos. 50, 88, 91, 406, 410, 541, 701 として *bé* (小、幼) を表わし、一方 No. 330 として *bé* (析) No. 487 として *bát* (捉、握) No. 656 として *viêt* (書く、写す) の音註となる。玄本の「教吝蜜」は若し「吝」を衍字を見るなら、「教蜜」(*kau man*) は *gió mát* (とら風) と解するところが出来よう。

47 風来 教頼 (MM kiau lai); (倫本) 麦憂 *gió lai* (SV)

越語で「来る」義の語は *lai* (来) の SV) であるから、「頼」はその音註であることは明らかで、玄本の「類」(*lei*) よりも的確である。「頼」は No. 444 として同音を表わし、別に No. 218 として *lât* (栗) の SV) No. 227 として **blái*

(▷trai, 果物) No. 270 にて rai (獺) の音註となる。倫本の「麦憂」は本来下例 (No. 48) に充てられるべきものが紛込んだものである。

48 大雨 憂麦: (玄本) 憂墨

mura cá

音註の語順は「麦憂」となすべきである。

49 雨大 麦憂: (倫本) 箇麦

mura cá

mura cá の語義を按ずるに、「大雨」の義にもなれば、又「雨が激しく降る」義ともなる。蓋し mura は「雨」と云う名詞であり、又「雨がふる」と云う動詞であり、一方 cá は「大きい」と云う形容詞でもあり、又「大きく」と云う副詞でもあることによる。本例の「雨大」は「雨が激しく降る」意味であるが、Gaspardone 氏は cá mura と解する。これでは意味が通じない。倫本の「箇麦」は No. 51 の「有雨」に充てられるべき音註である。尚玄本は本例を欠く。

50 雨小 麦別: (玄本) 墨別

mura bé

51 有雨 箇麦: (倫本) 教頼
(玄本) ケ墨

có mura

倫本の「教頼」は No. 47 の「風来」に充られるべき音註で、倫本ではこの二つ (即ち Nos. 47, 51) の音註が入違いになっている。

52 無雨 張箇麦: (玄本) 張ケ墨

chàng có mura

B 地理 門 (Nos. 53—98)

53 地 得: (倫本) 得把

đát

「得」(AC tak) は本例及び No. 64 で đát を表明するが、本例では「地」の義のあるのに対して No. 64 では「土」

の義となつている。倫本の「把」は No. 55 の「海」の音註が紛込んだものである。交稿は「地」に「煙(烟)」を当てるが、これは未だに解釈が付かない。又天明訳語では「リヤ」、「タウへ」を「地」の訳音としてゐる。前者は *đia* (地の SV) であり、後者は *đat* を指すのじであらう。

54 山 内 (EM *nuei*)
(MM *nei*) *núi*

「内」は本例と Nos. 68-75, 240 とし *núi* (山) を表わし、別に Nos. 345, 634 とし *nôi* (鍋) No. 366 とし *niêu* (甑、即ち土鍋) の音註となる。交稿では「山」に「幹隈」(*kan ui*) があしらはれてゐる。これは *cái* (倍数詞) *núi* の音訳かも知れないが、近代越語では *núi* (山) に対する倍数詞としては *hôn* が使用され、*cái* を用ゐることはなう。

55 海 把 (*pa*) *bá*

「把」は本例で *bé* (海) を表わし、別に No. 402 とし *bà* (婆の SV) の音註となる。

56 河 空 (*k'ưn*) **không* (*sông*)

「空」は本例及び Nos. 85-88 とし「河」に対する音註となつてゐる。その表明せんとする音は現行の *sông* (「江」、Nos. 61, 83, 84) の古形たる **không* と思われる。Gaspardone 氏もこの語を **kr-* が *k'* に転化した *không* と解つた (Le Lexique, p. 359, n. 8, p. 365) が、*không* なる形は Dict. には見当らず、唯 *Mường* 語に *k'ôn*, *k'loin*, *kson* の形で残つて居り、これが近代越語の *sông* に相当することは疑を容れない。一方、玄本に於ける音註の充て方をみると、「河」に対しては均しく「空」をあつてゐるが、「江」に対しては No. 61 で「生」、「空」の二字をあつ、Nos. 83, 84 では「竜」(*lung*) をあつてゐる。この事は十六世紀中葉の越語に「江」を指す語として *sông*, *không*, *krông* の三形が並び行われたことを証する。尚「空」は別に Nos. 282, 515 とし *không* (孔の SV) の音註となつて

いる。

57 路 党 (tan)

đường

「党」は本例の外に、Nos. 90-93 でも同音を表わし、別に No. 131 にし *dàng* (藤の SV) の音註となる。

58 石 喇大 (la ta); (玄本) 刺大

đá thạch (SV)

「喇大」は本例及び Nos. 89, 92, 230, 629 にて「石」に対する音註となつてゐる。按ずるに、越俗語で「石」は *đá* と称し、又越読音では *thạch* (つまり石の SV) と称する。更に本訳語の音註の応用例を通観するに、例外なく一つの音註漢字が一つの越語音を表わしている。故に「喇大」も「石」の義を有する二語を訳したものと考へねばなるまい。先ず「喇」(「刺」は同音)が *đá* の音註となることの可能性に就ては、*l*-母の漢字で *d*-(*đ*-)母の越語を表記するのは充分に適切とは云えないが、併しその例は皆無ではない。例えば、No. 643 「鑄—路—*đúc*」の如く、「路」(*lư*)を以て *đúc* の音註となしている。この現象は勿論十六世紀の明代官話音には既に *đ*-母が喪失したので、*t*-母又は *l*-母で越語の *d*-(*đ*-)母を表明したものと云ふべし。更に「石」の SV は *thạch* で、入声の声調であり、その発音は「大」(MM ta; AC *t'ai*)に近く、かくて「大」の表現せんとする音は *thạch* であると推考される。Gaspardone 氏は「喇」を *la* の音註とし、「大」を *đá* の音註とみなして、前者を陪数詞 (*particule générique*) と解するが、*la* は紙又は樹葉の陪数詞であり、石の陪数詞は *hòn* であることを認めしる (Le *lexique*, p. 365, n. 2)。かく見ると、本例は矢張 *đá thạch* と解した方が妥当のようである。更に「喇大」両字の音註としての応用状況を見るに、「喇」は No. 219 にし *lá* (葉)・No. 267 にし *la* (驟の SV)・No. 383 にし *lạt* (喇の SV)・No. 566 にし *lập* (蠟の SV) の音註となり、「大」は Nos. 543, 551 にし *đái* (帯の SV) の音註となつてゐる。

59 水 匱 (ni); (玄本) 匱

nước

「匿」(AC niək) は本例及び Nos. 76-82, 612, 613, 627, 643 について同音を表わす。玄本の「水」に対する音註のあて方は頗る杜撰であつて、本例及び Nos. 76-82 では「𠄎」をあてているが、Nos. 612, 613 では「泥」(ni)をあて、No. 627 では「兀」(u) No. 643 では「𠄎」(nie)をあてている。その内、「𠄎」は明らかに「匿」の譌であり、その外の音註も「匿」の音値に比べて遜色があるので、本文では一律に「匿」を採用する。交稿は「掠」(AC liək)を「水」に對する音註としてゐる。

60 井

敬 (kian)

giəng

giəng(井戸)は Dict. では gyəng' Mường 語では chiəng と称する (Gaspardone, Le lexique, p. 365, n. 4)。

61 江

生 (sən); (玄本) 生空

sông

「生」は本例と Nos. 83, 84 で sông の音註となり、別に Nos. 288, 503, 628 について sùng (牙)を表わしている。本訳語の「江」に関する諸例を見るに、本例以外に「江深」(No. 83), 「江心」(No. 84)があり、「河」に関する語例としては上述の「河」(No. 56)以外に「河深」(No. 85), 「河浅」(No. 86), 「大河」(No. 87)及び「小河」(No. 88)がある。この様に「江」と「河」の語例が並存するのは「江」を「大川之通称」とし、「河」を「水之通称」とする中国人古来の觀念によるのであろう(辞源、p. 838, 849)。

62 牆

整 (tʃiəŋ)

tuəng (SV)

「整」は本例で tuəng (牆の SV)を表わす以外に No. 340 について giuəng (床) No. 397 について thim (孀母)の音註となる。

63 城

省 (ʃiəŋ)

sành

「省」は本例及び Nos. 97, 98 について「城」の越読 thành の variante たる sành を表わすと思われる。別に Nos.

313, 328 として *su'ôn* (梁) No. 513 として *sông* (鼻梁) の音註となる。

64 土 得; (玄本) 特

đát

玄本は No. 53 の「地」(*đát*) に対しては「得」をあて、本例の「土」に対しては「特」(AC *d'ak*) をあてている。併し越語で「土」と云うも、「地」と云うも均しく *đát* であつて他語は考えられない。この様に音註の採用に當つて統一性を欠くのは玄本の欠点である。本例では No. 53 同様、「得」に従うことにする。

65 池 敖 (*au*); (玄本) 洑

ao

「敖」(傲) は本例にして *ao*、別に Nos. 538, 545-553 として *áo* (衣) の音註となる。玄本の「洑」(*xuan*) は如何なる音を指すのか不明である。

66 沙 施; (玄本) 夾 (*ka, kia*)

cát

諸本の音註「施」(*si*) は *sa* (沙の SV) を表わすと思われるが、玄本独り「夾」(AC *kap*) を以て俗語 *cát* (砂) を表明する。Gaspardone 氏は「施」を以て *sôi* を表わすと解したが、*sôi* は砂利、小石を指し、嚴密な意味での沙(砂)ではない。「夾」は本例以外に、No. 546 として *kép* (裕) No. 716 として *kép* (扁平) の音註となる。

67 泥 懶; (近本) 癩 (*lai*)

lây

越語で *lây* は泥沼、沼沢のことであり、近本の「癩」がこの音を表わすと思われる。

68 山高 内高 (*nei kau*)

núi cao (SV)

「高」は本例で *cao* (高の SV) を表わし、別に No. 217 として *cau* (檳榔の実) No. 284, 299, 301 として *kêu* (甘(糖)豆) No. 593, 594 として *cay* (辛(胡椒)の音註となる。

69 山低 内得; (玄本) 内持

núi thấp

玄本の「内持」は若し「内特」(nuei te) の譌であるならば、núi tháp とある。

70 山上 内連; (玄本) 連内 *tiên (trên) núi

近代越語の trên は Dict. では tiên と表記し、明らかに流音を保持していたことがわかる。「連」は云うまでもなく、その音註である。語順は玄本の方が正しい。

71 山下 内得; (玄本) 得内 dưới núi

72 山前 内勤 (nuei lei); (玄本) 指内 *trước (trước) núi

「勒」(AC lek) は本例と Nos. 140, 142, 694 の trước (前) の中古音 *trước を表わしている。Dict. も *trước とす。玄本は本例の「前」に「指」(tʃi), No. 694 の「前」に「剪」(tsien) をあつらえる。語順は「勒内」とするのが正しい。「勒」は更に No. 237 の tʃi (謝) No. 266 の lư (櫛) Nos. 289, 399 の *tlai (▷trai 児) No. 329 の tʃi (蓋) No. 363 の trước (梳) の音註となつてゐる。

73 山後 内稍; (玄本) 稍内 (Sau nuei) sau núi

「稍」は本例及び Nos. 138, 145, 511, 695 の sau (後) の音を表わし、別々 Nos. 95, 189, 592 の rau (蔬菜) の音註となる。

74 山辺 内辺; (玄本) 辺内 (piên nuei) bên núi

「辺」は本例と No. 83 の bên (傍に、側) の音註となる。ちなみに「辺」の SV は biên じ、bên ぢの variante である。

75 青山 蒼内; (玄本) 内蒼 núi xanh

76 水深 匿萋 (ni liu); (玄本) 区萋 nước *krâu (sâu)

「夔」は本例及び No. 85 で中古越語 *krâu (◇sâu, 深い) を表記するものと思われる。sâu の字喃は「樓」で、声符は同じく「夔」を採用している。この事は古代及び中古越語に於ける *kr- 母の存在を証するものである。「夔」は別に Nos. 217, 219 及び *tlâu (◇trầu, きんぎょ) の音註となつてゐる。

77 水浅 匿干 (ni kan); (河本) 匿干 (玄本) 区干 nước cạn

「浅」に対する音註は「干」が正しく、cạn (浅い) の音を表わす。「干」は又 No. 86 にて同音を表わし、別に No. 228 及び cam (柑、みかん) No. 392, 407, 412, 524 及び con (陪数詞) No. 421 及び gian (奸の SV) No. 347 及び guom (劍) No. 568, 596-598, 616 及び com (飯) の音註となつてゐる。

78 水清 匿竜 (ni lung); (玄本) 区竜 nước *tlong (trong)

「竜」(龍) は *tlong (◇trong, 清い、澄んだ) を表わす。

79 水渾 匿毒 (ni tu); (玄本) 区毒 nước đục (SV)

「毒」は đục (濁の SV) を表わす。

80 水流 匿載 (ni tsai); (玄本) 区載 nước chảy

「載」は chảy (流れる) を表わす。

81 水落 匿吝; (玄本) 匿幹 nước lặn

玄本の「幹」は何を表わすか不明。

82 水出 匿末; (玄本) 区連 nước *tlen (trên)

動詞「出る」の音註として諸本が機械的に一律に「末」をあてて mọc と読ませるのに反して、玄本が「連」をあてるのは卓見である。越語で「水が出る」又は「水かさが増す」と云う場合は nước lên が正しい。玄本の「区」は上述の

通り「匿」の誤伝であるから、本例の音註は「匿連」とすべきである。

83 江辺 生辺：(玄本) 辺竜

bên sòng

84 江心 生朗：(Sag Iag)：(玄本) 美竜

lòng sòng

No. 83 及び本例にて、諸本は音註に「生」をあて、sòngと読ませるのに反して、玄本は「竜」をあて、中古音の*krôngを示唆している。次に「心」(又は腹、肚)に当る語の lòng の音註として諸本は本例及び Nos. 496, 501, 518, 527-532, 617 にし一律に「朗」をあてるが、玄本は本例に「美」(弄ならん)、Nos. 496, 617 とし「鬪」(No. 501 とし「𠵼」(Nos. 527-529 とし「朗」(No. 518 の「肚」には「達」(Nos. 530-532 とし「竜」をあて、頗る統一を欠いている。これらの音註の内、No. 501 の「兄」は「胸」の越読 hung に対する音註であり、「朗」よりも適當であると思われるからこれを採用することにして、その他の音註は或は「朗」の音値と大差なきもの、或はその語例に妥当しないと思われるので、一律に「朗」を採用することにした。尚「朗」は別に Nos. 417, 639 とし lành (良好) の音註ともなっている。

85 河深 空夔

*không (sông) *krâu (sâu)

86 河浅 空干

*không (sông) càn

87 大河 憂空：(玄本) 空憂

*không (sông) cã

88 小河 別空：(玄本) 空別

*không (sông) bé

89 大石 憂喇大：(玄本) 刺大憂

đã (thach) cã

90 大路 憂党

đường cã

音註の語順は「党憂」が正しい。玄本は本例を欠く。

91 小路 別党 *đường bé*

音註の語順は「党別」が正しい。玄本は本例を欠く。

92 石路 喇大党；(玄本)党刺大達 *đường đá (thạch)*

玄本の音註の「達」はその直ぐ前の「大」と同音であり、恐らく衍字であろう。

93 遠路 賒党；(玄本)党賒 (*tag Sie*) *đường xa*

「賒」は *xa* (遠い) を表わす。

94 菓園 拜文 (*pai van*) *vuòn *blái (trái)*

「拜」は本例及び Nos. 188, 215, 216, 218, 228, 239, 595 として **blái* (▷*trái*, 果物、果実) を表わし、別に No.

228 として *buó'i* (柚) の音註となっている。「文」は本例及び Nos. 95, 96 として *vuòn* (園) を表わし、別に No.

268 として *vuòn* (猴) の音註となる。音註の語順は「文拜」が正しい。

95 菜園 稍文；(玄本) 文稍 *vuòn rau*

96 花園 滑文 (*xua van*)；(玄本) 文花 *vuòn hoa (SV)*

諸本は「滑」を以て「花」の越読たる *hoa* を表わし、本例以外に Nos. 185, 232, 235-238, 594, 652, 672 として音を表わしている。これに反して、玄本は本例では「花」を、No. 185 には「滑」、No. 235 では「滑」、No. 236 では「花」、No. 237 では音註を欠き、No. 238 では「花」、No. 594 では「華」、Nos. 652, 672 では「花」と云う風に頗る統一性を欠いている。按ずるに「滑」・「花」・「華」共に同音であるから、本文では一律に「滑」に従うことにする。

又天明訳語で「花」に「クワ」をあてるのは恐らく「フワ」の誤りであろう。

97 城外 省歪；(玄本) 歪省 (*vai san*) *ngoài sành*

「歪」(AC nguai) は本例にて ngoài (外に) を表わし、別に Nos. 401-404, 699 とし ngoài (外の SV) の音註となる。

98 城辺 省辺; (玄本) 辺省 bèn sành

C 時 令 門 (Nos. 99—184)

99 年 難 (nan) năm

「難」は本例及び Nos. 143-147 とし năm (年) を表わし、別に No. 370 とし nòn (筭) の音註となる。

100 早 甚 sòm

101 晚 对 tòi

102 時 覚 (EM kau MM kiau); (玄本) 史 giò

「覚」は本例で giò を表わす。玄本の「史」(Si) は編者の感違で「時」の漢音を表わしたのであるか。

103 昼 弄露 (luj ai) *tlong (trong) ngài

「弄」は本例で *tlong (◇trong; 中、内) を表わし、別に No. 244 と long (龍の SV) No. 276 と lóng (羽毛) No. 378, 563 と lóng (籠の SV), No. 432 と lung (轡の SV), No. 708 と rông (鬪、広) の音註となっている。近代越語は「昼」を trũa と称するが trong ngày (日中) の形で「昼」を表わすことも有得ることであろう。もつとも本書で「中」又は「内」を表わす場合は Nos. 34, 597, 693 に見られる如く、「冲」が音註となっている。要するに、「中」に相当する越語の音註として「冲」と「弄」の両字があてられて居り、この事は十六世紀に於て tlong と trong の両語が共に使用された証拠であろう。

104 夜 顛 (tien) ðem

「顛」は本例及び Nos. 175-177, 179 について ðem (夜) を表わす。

105 陰 対; (玄本) 兌 tòi

「対」と「兌」(tuei) は同音なれども、他の用例を考慮して、「対」を音註に採用する。

106 晴 旦; (玄本) 当 tành (SV)

107 晨 盛 (Sien) sàng

「盛」は本例で sàng (朝、明るう) を表わす。sàng に「晨」(朝)、「明るう」の両義が存すると同様 tòi (Nos.

23, 101, 105, 598) にも「晚」と「陰」(暗う) の両義がある。

108 午 悪 (au; u AC ak); (玄本) 兀霧 ngò (SV)

「悪」と「兀」は同音。諸本は本例及び No. 127 の「午」に対して同じく「悪」をあてるが、玄本は本例に「兀霧」をあげ、No. 127 では「悪」となっている。音註は「悪」を採ることとする。「悪」は本例及び No. 127 の ngò (午の SV) を表わす外、No. 322 について ôc (屋の SV) の音註となる。近代越語で「午」は「昼」と同じく trua と称するが、玄本の「兀霧」(ngò ngáy) は日中のお午の意味で、夜間の午時と区別する積りかも知れない。

109 古 施 (Si) xua

「施」は本例で xua (昔、古) を表わすが、No. 642 では sa (沙の SV) の音註となる。

110 今 奈 (nai) nay

「奈」は本例及び Nos. 136, 141, 143 について nay (今、現今の) を表わす。

111 甲 甲 (ka; kia; AC kap); (玄本) 夾 giáp (SV)

「甲」は本例及び No. 351 につき *giáp* (甲の SV) を表わす。玄本の「夾」は「甲」と同音、AC も双方共に **kap* である。

112 乙 厄 (MMo); (玄本) 兀 *át* (SV)

音註として「厄」と「兀」が与えられたが、前者の AC は *ek* であり、後者の AC は *nguat* であり、前者の方が「兀」の SV たる *át* に近いから、「厄」を音註に採用する。尚「厄」は No. 207 及び *ngái* (艾の SV)、Nos. 289, 291-293, 298, 380 につき *ngũa* (馬) の音註となる。

113 丙 并 ^(EM pjan)_(MM ping) *bính* (SV)

「并」は本例及び *bính* (丙の SV) を表わし、別に No. 348 につき *bính* (瓶の SV) の音註となる。

114 丁 定 ^(EM tjan)_(MM ting) *đinh* (SV)

「丁」は本例及び No. 223 につき *đinh* (丁の SV) を表わす。

115 戊 末 *mậu* (SV)

116 己 吉 *(ki)* *ki* (SV)

「吉」は *ki* (己の SV) を表わす。

117 庚 網; ^(静本、倫本)_(近本、玄本) 網 *canh* (SV)

音註は「網」が正しく、*canh* (庚の SV) を表わす。

118 辛 登 *(taj)* *tân* (SV)

「辛」は本例及び *tân* (辛の SV) を表わす外、No. 466 及び *tiên* (進の SV)、No. 470 及び *đung* (丁の SV)、No. 574 及び *tương* (響の SV) の音註となる。

119 壬 忍 nhâm (SV)

120 癸 貴 (kuei) quý (SV)

「貴」は本例じ *quai* (癸の SV) を表わす。

121 子 字 (tsi) tú (SV)

「字」は本例及び Nos. 431, 432 じじ *tú* (子の SV) を表わす。但し十二支の子は俗音じは *ti* と称する。

122 丑 轉 (t'ou) s'ru (SV)

「轉」は本例じ *s'ru* (丑の SV) ' No. 640 じじ *xâu* (醜) ' 悪) を表わす。

123 寅 仍 (zian) dân (SV)

「仍」は *dân* (寅の SV) を表わす。

124 卯 毛 (mau) mào (SV)

「毛」は本例じ *mào* (卯の SV) ' 別に No. 286 じじ *mâu* (母の SV) ' No. 714 じじ *mau* (緊'急) を表わす。

125 辰 忱 (EM ts'iam MM ts'an) ; (玄本) 沈 thán (SV)

「忱」は本例じ *thán* (辰の SV) を表わす (俗音は *thín*) ' 別に No. 212 じじ *trám* (沈の SV) の音註となる。

「忱」と「沈」は同音である。

126 巳 的 (ti) ti (SV)

「的」は *ti* (巳の SV) を表わす。

127 午 悪 ngó (SV)

128 未 威 (uei) vi (SV)

「威」は本例で vi (未の SV) 別々 Nos. 246, 287, 288, 296, 628 及び voi (象) を表わす。

129 申 珍 (tʃian); (倫本) 珍 (玄本) thân (SV)

「珍」と「珍」は同音、 「珍」は thân (申の SV) を表わす。

130 酉 幼; (阿本) 幼 (iou) *yâu (SV) (dâu)

音註は「幼」が正しく、「幼」は *yâu (▷dâu) を表わす。

131 戌 足 (EM tsiu) tuât (SV)

「足」(AC tsiwok) は tuât (戌の SV) を表わす。

132 亥 蓋; (倫本) 蓋 (xo) hoi (SV)

音註は「蓋」が正しく、 hoi (亥の SV) を表わす。

133 冷熱 郎僕 (lag p'u) lạnh bức

「郎」は本例で lanh (冷) を表わす、又 No. 229 及び lang (榔の SV) の音註となる。「僕」(AC b'uok) は本例及び No. 613 及び bức (熱) を表わす。俗に「冷熱」は rét nóng とも称する。

134 春夏 中嫁 (tʃung ka) xuân (SV) hạ (SV)

「中」は本例で xuân (春の SV) を表わす、別々 No. 274 及び chòm (鬚「たじがむ」、No. 331 及び chuông (鐘)、No. 512 及び dương (陽の SV)、No. 528 及び rộng (寛「広」) の音註となる。「嫁」は本例で hạ (夏の SV)、Nos. 258, 304, 305 及び cá (魚) を表わす。玄本は本例の音註を欠く。

135 秋冬 初東; (倫本) 東初 (玄本) 初東 (tʃu tung) thu (SV) đông (SV)

音註は「初東」が正しく、「初」は本例で thu (秋の SV)、No. 373 及び thu (鞞の SV) を表わす、「東」は本例

đông (冬の SV) を表わす。

136 今日 奈靄

ngày nay

近代越語では ngày nay は「当今」、「現今」の意味で、「今日」に相当する語は hôm nay である。寛政訳語は「今日」に「スツシ」をあてる。その根拠は未詳である。

137 明日 売靄 (mai ai)

ngày mai

「売」は本例で mai (明日の「明」) No. 144 にし mai (明年の「明」) を表わし、別に Nos. 178, 179 にし mây (不定数詞の「幾」) No. 324 にし mái (瓦) No. 573 にし muối (塩) の音註となる。寛政訳語では「メウヲ」をあてる。これは mai を表わしたのであろう。

138 後日 稍靄; (玄本) 考靄

ngày sau

本例の「後日」は「明後日」の事であり、近代越語では ngày kia と称する。但し将来の意味での「後日」ならば、ngày sau は矢張り用いられる。玄本の音註「考」(krau) は注目に値する。これは *kr- 複声母の存在を証し、未だ sau に転化しない *krau と云う語形も行われたと考えられる。尚玄本は No. 145 の「後年」に対しても音註として「考難」をあてている。

139 昨日 熱靄 (zie ai); (近本) 熟靄

ngày rồi

本例の音註は「靄熱」を採用して、ngày rồi と解すべきであらう。rồi は完了の助詞で、漢語の「了」に相当する。ngày rồi は多分 ngày vừa qua rồi (すぎ去つたばかりの日) の省略であらう。近代越語は「昨日」を hôm qua 又は ngày hôm qua と称す。Gaspardone 氏は「熱靄」を採用して ngày xua と解せられたが、越語に ngày xua は単に xua と同じく、「昔」を漠然と指し、「昨日」の義はない。「熱」は別に No. 522 にし rửa (洗) の音註と

なる。

140 前日 勒靄：(玄本) 名靄

ngày *tluó.c (truó.c)

近代越語で前日(一昨日)は *hôm kia* と称する。玄本は本例及び No. 142 について「前」に対する音註として「名」をあてるが、これは「加」(*kia*)の誤写ではないかと思われる。若し「加靄」ならば、*ngày kia* と解し得るが、近代越語の用例では *ngày kia* は「後日」(即ち明後日)であつて、前日(即ちおととし)の義ではない。

141 今月 奈燙 (nai taŋ)：(玄本) 奈蕩

tháng nay

「燙」(*taŋ*)と「蕩」(*taŋ*)を比較すると、同音なれども、前者は有気音であるから *tháng* (曆上の月)に比較的近いわけである。「燙」は本例以外に Nos. 142, 148-161 について同音を表わしている。

142 前月 勒燙：(玄本) 名蕩

tháng *tluó.c (truó.c)

玄本の「名蕩」は No. 140 の「名靄」と同じく、若し「名」が「加」の誤であるならば *tháng kia* と解せられる。但し、近代越語で、*tháng kia* は単に「その月」の義しかない。

143 今年 奈難

năm nay

144 明年 売難

năm mai

近代越語では *sang năm* と称する。

145 後年 稍難：(玄本) 考難

năm sau

No. 138 参看。近代越語で「後年」(明後年、再来年)は一般に *sang năm nữa* を使用するが、*năm sau* でも通じない事はない。

146 去年 低難：(玄本) 麦難 (*mo nan*)

năm vửa

諸本は本例で「去年」に「低難」をあて、又 No. 433 で「去」(動詞)にも「低」をあてている。これは明らかに機械的な音註の仕方であつて、実際の越南語の語法を無視したものである。これに対して、玄本は本例に「麦難」、No. 443 にて「抵」をあて、はつきりと區別している。「麦」(AC mwa:k) は本例で *vừa* (今し方) を表わすと思われるから、「難」と合して *năm vừa* と解することが出来る。近代越語では一般に *năm ngoài* を使用するが、*năm vừa* と *năm qua* とも *năm vừa qua* とも云われる。

147 旧年 葛難 (ko nam)

năm cũ

「葛」(AC kat) は本例で *cũ* (旧) を表わし、別に Nos. 208, 241, 323, 595 にて *cỏ* (草)、『No. 559 にて *cát* (葛の SV) の音註となる。近代越語では「旧年」(一昨年) の *cũ* を一般に *năm kia* 又は *năm trước* と称し、『*năm cũ* は却つて昨年(去年)の義となる。尚 Gaspardone 氏は本例を *năm cũ* と解する。Cỏ は「故」の SV である。

148 正月 蒸燙 (tʃian t'ang); (玄本) 蒸蕩

*tháng *chiêng (giêng)*

「蒸」は「正月」の「正」に相当する語の **chiêng* (>*giêng*) を表わすものと推考される。「正」の SV は *chính* (Gaspardone 氏は斯く解する) であるから「蒸」は *chính* の音註とも考えられるが、「正月」の場合は一般に (*tháng*) *giêng* と称する。

149 二月 哈燙 (EM t'ai t'ang); (玄本) 文蕩

tháng hai

「哈」は本例及び Nos. 159, 163, 172, 181, 434, 677 にて *hai* (数詞「二」) を表わす。玄本は一律に「亥」(*xai*) とあてているが、「哈」と「亥」は同音である。

150 三月 巴燙 (pa t'ap); (玄本) 把蕩

tháng ba

「巴」(「把」は同音) は本例及び Nos. 164, 173, 182, 435, 678 にて *ba* (数詞「三」) を表わす。字喃は「𠵼」と

書き、同じく「巴」を声符に採用している。

151 四月 奔燙 (pan t'ang); (玄本) 半蕩

tháng bôn

「奔」は本例及び Nos. 165, 183, 436, 679 として bôn (数詞四) を表わす。「奔」と「半」は近似音。

152 五月 喃 (nam t'ang); (玄本) 難蕩

tháng nâm

「喃」は本例及び Nos. 166, 184, 680 として nâm (数詞五) を表わし、別に Nos. 222, 690 として nam (南の SV), No. 450 として nâm (睡、横になる) の音註となっている。「喃」と「難」は同音。

153 六月 哨燙 (sau t'ang); (玄本) 包蕩

tháng sáu

「哨」は本例及び Nos. 167, 681 として sáu (数詞六) を表わす。諸本の「哨」に対して、玄本は以上の各例にて「包」をあげている。この事は *pr- が未だに s- に転化しない *prâu なる形も行われたことを証する。

154 七月 擺燙: (倫本) 擺燙 (pai t'ang)
(玄本) 白蕩

tháng bảy

音註は倫本の「擺燙」が正しく、本例と Nos. 168, 682 として bảy (又は bảy; 数詞七) を表わし、別に No. 543 として buộc (しげる) の音註がある。「白」と「擺」は同音。

155 八月 滲燙 (sem t'ang); (玄本) 旦蕩

tháng *sâm (tâm)

「滲」は本例と Nos. 169, 683 として *sâm (◇tâm; 数詞八) を表わすと思われるが、玄本が「旦」(tan) をあげているところからみると、既に tám の音も存したことがわかる。

156 九月 軫燙 (t'ian t'ang); (玄本) 進蕩

tháng chin

諸本の「軫」は本例及び Nos. 170, 684 として chin (数詞九) を表わす。「進」と「軫」は近似音である。

157 十月 邁燙: (玄本) 每蕩
tháng mười

「邁」(mai) と「毎」(mei; AC muài) とでは、「毎」の方が比較的 mười (数詞十) に近いので、本例の音註としては諸本と玄本双方の音註を折衷して「毎燙」とする。「毎」は本例と Nos. 158, 159, 172, 437, 685 とし mười (数詞十) を表わし、Nos. 172, 173 とし mười (同じく数詞十)、No. 196 とし mai (梅の SV) の音註となる。

158 十一月 邁没燙: (玄本) 每莫蕩 tháng mười một

「没」と「莫」は同音なれども、前者の AC は muət であり、後者の AC は māk であり、前者が một (数詞一) に近いので、「没」を音註に採用する。「没」は本例と Nos. 162, 180, 676, 686-688 とし một の音註となる。近代越語で、「十一月」は普通 mười を省略して tháng một とする。

159 十二月 邁哈燙: (玄本) 每亥蕩 tháng mười hai

近代越語では普通「十二月」を tháng chạp (即ち臘月) と称する。

160 月半 (阿本、内本、河本) (欠文): (倫本、近本、静本) 燙也 (tray nie) nửa tháng

「セ」の音値は nie, mie と二通りあり、前者は本例と No. 321 で nửa (半) を表わし、後者は Nos. 390, 405, 439-442 とし me (母)、No. 537 とし miết (襖の SV) の音註となる。

161 月尽 燙末: (倫本、内本) 燙末 mat tháng (玄本) 蕩抹

Maspero は曾って本例を tháng vi と解した(上引論文 p. 74)が、その意味がはつきりしない。若し vi を「末」の SV と見ても、QN では vi と表記されねばならぬ。又「末」・「末」・「抹」の内、「末」を音註に採用するならば、「月尽」は月末のことであるから「燙末」は vi tháng (vi は「尾」の SV) とも解せられるが、倫本と内本が「末 (mo) をあて、玄本又「抹」(mo) をあてるからには、やはり「末」(AC muət) を以て mat (末の SV) を表わしたものと解した方が妥当であろう。近代越語では「月末」のことを cuối tháng と称する。

162	一日	没靄:: (玄本) 莫靄	một ngày
163	二日	哈靄:: (玄本) 亥靄	hai ngày
164	三日	巴靄:: (玄本) 把靄	ba ngày
165	四日	奔靄:: (玄本) 半靄	bốn ngày
166	五日	喃靄:: (玄本) 難靄	năm ngày
167	六日	哨靄:: (玄本) 包靄	sáu ngày
168	七日	擺靄:: (玄本) 白靄	bảy ngày
169	八日	滲靄:: (玄本) 旦靄	*sám (tám) ngày
170	九日	軫靄:: (玄本) 進靄	chín ngày
171	十日	邁靄:: (玄本) 每靄	mười ngày
172	二十日	哈邁靄:: (玄本) 亥每靄	hai mươi ngày
173	三十日	巴邁靄:: (玄本) 把每靄	ba mươi ngày

「日—靄」の部份は No. 2 参照。数詞の部份は Nos. 149-158 参照。筆者は以上の十二例に見える数詞は何れも基数形容詞と解するが、Gaspardone 氏はこれを ngày một, ngày hai, ... ngày ba mươi と云ふ風に序数形容詞と解してゐる。

174 連日

对靄:: (玄本) 兌靄

đôi (SV) ngày

đôi は「对」の SV であるが、僅少の不定数詞としても用いられる。例えば 'đôi ba ngày (両三日)'、'đôi ba người (二、三人) 等々。Gaspardone 氏は本例を 'đôi ngày と解するが、' 'đôi は「鎖」「関係」の義である (Gustave

Huế, p. 920)。

175 連夜 対顛；(玄本) 兌顛

đôi (SV) đêm

Gaspardone 氏は上例と同じく、*tôi đêm* と解する。

176 夜短 顛半

đêm vắn

177 夜長 顛倭；(玄本) 売顛倭

đêm *yài (dài)

立本の「売」(mai) は衍字であろう。

178 幾日 売靄

mấy ngày

179 幾夜 売顛

mấy đêm

180 一更 没羹 (mo kieng)；(玄本) 莫羹

một canh (SV)

181 二更 哈羹；(玄本) 亥羹

hai canh (SV)

182 三更 巴羹；(玄本) 把羹

ba canh (SV)

183 四更 奔羹；(玄本) 半羹

bốn canh (SV)

184 五更 喃羹；(玄本) 難羹

năm canh (SV)

数詞部份は Nos. 149-152, 158 参照。「羹」は以上の諸例 (Nos. 180-184) に *canh* (更の SV) を表わし、別に No. 355 の *gương* (鏡) の音註となる。筆者は Nos. 180-184 の数詞を Nos. 162-173 の如く基数形容詞と見たが、Gaspardone 氏は *canh một, canh hai, …* と解して、序数形容詞と見なしてゐる。

D 花 木 門 (Nos. 185—243)

- 185 花 滑 hoa (SV)
 186 木 格 (kai) cây
 187 樹 格; (玄本) 朱 cây

越語で「木」と云うも、「樹」と云うも均しく *cây* である。「格」はこの二例の外、Nos. 211, 229 で「木」の義の *cây* を表わす。玄木の「朱」(t'ciu) は *thù* (樹の SV) を表わすものらしい。天明訳語では「モク」をあてる。これは明らかに *mộc* (木の SV) を訳したものである。

- 188 菓 捰 *blái (trái)

近代越語で「菓」(果物)の総称は普通 *hoa quả* (花果の SV) で、且つ *quả* (果の SV) を陪数詞に用いて、*quả đào* (桃)、『*quả chuối* (バナナ)の如く総ての果物名に附する。trái は現今では余り用いないが、それでも trái cây (果物)の名称に残っている。

- 189 菜 稍 rau
 190 蓮 山 (San) sen

「山」は本例及び Nos. 232—234 にて *sen* (蓮) を表わす外、No. 226 にて *xo* (纖維)の音註となる。

- 191 藤 党 đàng (SV)
 đàng は「藤」の SV であるが、俗称は *mây* である。

- 192 杏 恒 (xan) hành (SV)

「恒」は *hành* (杏の SV) を表わす。

- 193 桃 討 (tau) đào (SV)

「討」は *đào* (桃の SV) を表わす。

194 李 門 (*man*)

màn

越語で「李」(すもも)を指す語はその SV を *ly* と称するか、又は俗名に *ly* と称する。 「門」は本例で *màn* (李の俗名) を表わす外、 No. 209 で *mun* (烏木)、 Nos. 343, 632 で *mâm* (盆) の音註となる。

195 梨 鐸里 (*tau li*)

lè (SV) *tau*

「里」は *lè* (梨の SV) を表わす。又「鐸」は本書の用例を見るに、 *đò* (紅い)、 *đuà* (箸)、 *đâu* (豆)、 *tôt* (善い) 等の音を表わしているので、 *Gaspardone* 氏は本例を *lè đò* と解せられた。唯越語で *lè đò* (赤い梨) と云う果物名が実際には存しないので妥当ではない。按ずるに、越南の梨に *lè tau* (*poirier de Chine* 中国種の梨) なる名称がある (G. Hué, p. 492); *tau* は「鐸」の SV であり、越南人が中国又は中国人を指す語であり、且つ音註の「鐸」(*tau*) に合致するので本例の訳語としては適当であろう。尚「鐸」の初期官話音に二読あり、一は *to* 他は *tau* であるが、本例の「鐸」は後者に従う。

196 梅 每

mai (SV)

「每」は *mai* (梅の SV) を表わすが、俗称は *mo* である。

197 葱 総; (玄本) 行 (*xan*)

hành

諸本の「総」は「葱」の SV たる *thông* を表わすが、玄本の「行」は明らかに俗称の *hành* を表示するので、本例はこれに従う。

198 蒜 対

tôi

199 瓜 滋 (*tsi*)

đuà

「滋」は本例及び No. 220 として *dũa* (瓜) を表わし、別に No. 448 として *từ* (辞の SV) の音註となる。

200 茄 賈 (*ka, kia*) *cà*

「賈」は本例で *cà* (茄の俗名) を表わし、別に Nos. 301, 302 として *gà* (鶏) の音註となる。

201 豆 鐸 (玄本) 奪 (^{EM tuo}_{MM t'o}) *đỗ*

諸本は本例及び No. 601 として、「豆」に対する音註として「鐸」をあてているが、玄本は本例に「奪」をあて、No. 601 の「豆腐」には「斗符」をあてて、これを区別している。斯く見ると、本例の「奪」は *đỗ* (豆の俗名) を、No. 601 の「斗」は *đâu* (豆の SV) を表わすと解すべきであろう。尚、「奪」は別に No. 384 として *tóa* (鎖の SV) を表わす。

202 米 稿 (*kau*) *gao*

諸本は本例及び Nos. 608, 609 として「稿」を音註として *gao* (米) を表わすが、玄本は本例で「稿」、Nos. 608, 609 として「交」(*kau*) を音註としてゐる。「稿」と「交」は同音であるから、一律に「稿」に従ふこととする。

203 柳 留 (*liou*) *liêu* (SV)

「留」は *liêu* (柳の SV) を表わす。

204 桑 都； (近本、静本) 都 (*tu*) *dâu*

音註は「都」が正しく、*dâu* (桑) を表わし、別に No. 644 として *đô* (鍍の SV) の音註となる。

205 枝 梟 (*ag*) *ngành*

「梟」は本例と No. 216 として *ngành* (枝) を表わす。

206 蒲 甫 (*p'u*) *bồ* (SV)

近代官話音で、「甫」は *fu, p'u* の二読があるが、本例では後者に従つて、*bồ* (蒲の SV) と解すべきであろう。

Gaspardone 氏は本例を *phù* と解するが、*phù* は「芙」の SV で、「蒲」とは関係がない。尚「甫」は別に No. 382 *phủ* (阜の SV) の音註となる。

207 艾 厄

ngải (SV)

208 草 葛

cỏ

209 烏木 門

mùn

210 檀香 单亭 (tan xəŋ); (玄本) 白丹

đàn (SV) *huơng* (SV)

「单」は本例で *đàn* (檀の SV), Nos. 547, 555 *đơn* (單の VS) No. 577 *đạm* (淡の SV) を表わしている。一方、「亭」は本例及び Nos. 211-214, 222, 223, 225, 241, 429 *hương* (香の SV) を表わす。玄本の「白丹」(*pai tan*) は *bach đàn* (白檀の SV) を表わしたのもである。

211 木香 格亭

huơng (SV) *cây*

近代越語では *mộc hương* (木香の SV) と称する。

212 沈香 忱亭 (*Siam xəŋ*)

trâm (SV) *huơng* (SV)

P. Poivre, *Journal de voyage à la Cochinchine*, 一七四九年十一月十三日の日記に *bois d'aigle* (沈香) と三種の *phủ* *khi nam* (奇南) *tlam hieong* (沈香) 及び *thié hieong* (速香?) の名称を挙げている (Gaspardone, *le lexique*, p. 371, n. 5)。

213 速香 度亭 (*tu xəŋ*); (玄本) 亨度

tốc (SV) *huơng* (SV)

「度」は本例で *tốc* (速の SV), No. 654 *độc* (読の SV) を表わす。

214 乳香 布亭; (玄本) 由亭 (*iou xəŋ*)

nhũ (SV) *huơng* (SV)

諸本の「布」(pu)は「乳房」に当る越語の vú (No. 502)を表わしたのにちがいないが、本例の如く「乳香」と云う香料の名称にも「布」を音註に採用するのは機械的な註音の仕方である。本例は玄本の「由」を採用して nhũ (乳の SV) huông と解すべきである。

215 竜眼 弄言; (玄本) 拝言 (pai ien)

*blái (trái) nhãn (SV)

諸本の「弄言」(lung ien; 「言の AC ngian)は「竜眼」の SV たる long nhãn を訳したのであるが、実際の越南人の日常会話では long nhãn と称することは少く、普通果物の陪数詞たる quả (果の SV) を附して quả nhãn と云う。玄本の「拝言」は越南人の習慣に従って *blái (▽trái) nhãn の両語を表わしたものである。勿論この場合の *blái は果物の陪数詞として使用されている。尚、「言」は No. 514 としても nhãn (眼の SV) を表わしている。又 No. 710 について nhọn (尖った) の音註となる。

216 荔枝 拝昂; (玄本) 拝白 (pai pai)

*blái (trái) vãi

諸本の「拝昂」は No. 205 の「枝—昂—ngành」に基く直訳的な音註のあつ方であつて、本例の音註としては玄本の「拝白」が正しい。「白」は本例で vãi (荔枝の俗名) No. 226 の bạch (白の SV) No. 692 について bắc (北の SV) を表わす。

217 檳榔 寶郎; (玄本) 婁高 (lou kau)

*lầu (trầu) cau

本例の「檳榔」は樹木としての「檳榔子」のことではなく、古来華南から東南亜一带にかけて現地民が日常嚼する云々ゆる「檳榔」を指している。「檳榔を嚼する」とは蒟醬の葉 (bétel) に少しく白灰を塗り、それに檳榔子の実 (arec) を包んで嚼む風習を指す。要するに「檳榔を嚼する」場合は必ず蒟醬の葉と檳榔の実を一語に用うるので、越語では前者を trầu (giầu) 又は trầu (giầu) không と呼び、後者を cau と称し、両者合つて trầu (giầu) cau と称する。フ

ランス語でもこれに従って *bétel et arec* と呼ぶ。本例の「檳榔」に対して諸本は「賓郎」を音註となっているが、これは単に「檳榔」の SV を表わしたのに過ぎない。これに反して、玄本は「蔓高」を充て、「蔓」(lou) で *tlan (◇ trau) '「高」(kau) で cau (檳榔子の実) を訳している。

218 栗子 頼字: (玄本) 懶揮

*blai (trai) lât (SV)

「頼」と「懶」は同音。諸本の「頼字」(lai tsi) は lât tú (栗子の SV) を表わすと思われるが、玄本の「懶揮」は語順を倒置して「揮懶」とするのが正しく、これで *blai (◇ trai) lât を表わす。近代越語で栗子は普通 hạt rế と称する。

219 蔓葉 蔓喇

lá *tlan (trau)

「蔓」は *tlan (◇ trau; 蔓、即ち茹醬) を表わす。Dict. は blau (ぼ) ' Loureiro は tlan と表記せる。玄本は本例を欠く。「喇」は lá (葉) を表わす。

220 黃瓜 罔滋: (倫本) 罔滋 (玄本) 滋罔

dua vàng

音註は玄本の「滋罔」が正しい。

221 生薑 僧共 (Səŋ kuŋ); (玄本) 痕共

gung song

「僧」は本例及び No. 599 で sōng (生の、未熟の) を表わし、別に No. 484 で sōng (生きる) の音註となる。

「共」は本例で gung (= gāng; 薑の俗名) ' No. 243 で vung (芝麻、胡麻) ' No. 332 で *klōng (◇ trōng; 鼓) の音註となる。尚、「薑」の SV は khuong, cung の二読あり、Gaspardone 氏が「僧共」を sinh khuong (gingembre vert) (生薑の SV) と解している。

222 奇南香 奇喃亨: (倫本) 奇南亨 (玄本) 茄南亨、亨其南

ky (SV) nām (SV) huong (SV)

音註は何れも正しいが、三字とも SV であるので、底本の「奇喃(南)亭」に従って *ky nam hương* と訳した。「奇」は *ky* (奇の SV) を表わす。

223 丁香 定亭 (*tieng xeng*)

dinh (SV) *hương* (SV)

224 孩児茶 者 (*EM t'jie*)
(*MM ise*)

(*nhi trà*) (SV)

本例の「孩児茶」は日常飲むお茶の事ではなく、波斯及び緬甸に産するアカシヤの樹心より得たる液の凝結せる黄褐色の薬料で、「児茶」とも、「阿仙薬」とも称し、染料並に皮滑の用に供する。汪大淵、鳥夷誌略、須文那 (*Sunnath*) 条に、「孩児茶一名鳥參土、又名胥夷失之、其美檳榔汗(汁?)也」、藤田豊八博士はこれに注して、「孩児茶及 *Terra gaponica*, 由 *Mimosa Catechu* 製之、印度西岸 *Ancola* 北 *Concana* 岬上此樹自生極多、名曰 *kai'gi*, 孩児茶乃 *kai'gi* 对音也」と述べ、更に同書鳥參条にて藤田氏は鳥參を鳥土と同じく緬甸の古名と断じ、再び孩児茶に言及して、本草綱目では鳥參泥即ち孩児茶であり、緬甸では *Mimosa Catechu* を多く産するから、*Terra gaponica* は *Pegu Catechu* とも称せられると述べている(鳥夷誌略校注、p. 92b; p. 115a)。越南では「孩」の字を省略して「児茶」と称する。かく見ると、本例の「者」は明らかに (*nhi trà*) ((児)茶の SV) を表わしたのに外ならない。尚「者」は別に No. 567 の *trà* (茶の SV) の音註となつてゐる。Gaspardone 氏は本例の孩児茶を *Cachu* と解して、一応説明を加えながら、「者」を *xoài* (マンゴー) とよんでゐるのは瞭解に苦しむ。

225 蘇合香

多合亭 (*tuò xo xeng*)

tô (SV) *háp* (SV) *hương* (SV)

晋代の広志(卷二)に「蘇合香出大秦」とあり、フランス語では *storax* 又は *sapan* と称する。「多」は本例の *tô* (蘇の SV) No. 314 の *tư* (寺の SV) No. 544 の *to* (絲、きぬ) Nos. 610, 711 の *thô* (麤、粗の SV) No. 578 の *chua* (酸) を表わしてゐる。次に「合」の音値は *xo, ko* の二読がある、前者 (*AC rập*) は本例の *háp*

(hốp; 合の SV) No. 657 と học (学の SV) No. 674 と áp (鴨の SV) を表わし、後者は No. 262 と cấp (鵪
の SV) の音註となる。

226 綿花 白滑; (玄本) 白山明 (朋?) bach (SV) xơ bông

棉花のことを Loureiro は bach hoa xà (xơ) と称し、近代越語では普通 hoa bông 又は xơ bông と呼ぶ。xơ
は果実の繊維のことであり、bông は棉のことである。諸本の「白滑」は bach hoa を表わすが、これでは「白花」
の意味に過ぎず、「棉花」にはならない。玄本の「白山明」の内、「明」は明らかに「朋」(p'ên) の譌と思われるので、
音註は「白山朋」が正しく、これで以て bach xơ bông と解せられる。

227 棗兒 頼勒; (玄本) 頼道 (lai tau) *blái (trái) táo

越語で「棗」のことは táo (棗の SV は toả) である。玄本の「道」は táo の音註たる事疑いない。又「頼」の表わ
さんとする音も trái の中古音たる *blái 以外には考えられない。*blái に対する音註としては一般に「挿」が充てられ
ているが、考えて見れば明代官話音には複輔音が存在しないのであるから、*blái なる音に対しては「挿」でも「頼」で
も均しく音註になり得る訳である。Dict. も *blái táo となす。Gaspardone 氏は本例の語義を「棗花」とし、音註を
「頼勒」として lai-lác と解している。これは全然見当違いの解釈である。尚、「道」は別に No. 424 とし dào (道の
SV) を表わす。

228 柑子 挿字; (玄本) 挿干 (pai kan) *blái (trái) cam (SV)

Gaspardone 氏は blái từ と讀んで、trái dừa (coco) のことではなしかと推考したが、玄本の「挿干」を音註と
して勘考すれば、「挿」は上例の如く *blái 「干」は cam (柑の SV) を表わすことが容易に察せられる。尚越語では
柑橘類の果物を quả (trái) cam (orange), quả quít (橘の SV; mandarine), quả (trái) chanh (citron) と分

けている。

229 桃榔木

光郎格 (kuang lang kai); (玄本) 各広郎

cây quang (SV) lang (SV)

太平御覽(卷960)は博物志を引いて、「蜀中有樹、名桃榔、皮裏出屑如麵、用作餅食之、謂之桃榔麵」と述べ、南方草木状は「桃榔木出九真・交趾」となす。要するに現今称する所の沙穀樹 (sagoutier) である。尚音註の方は、諸本の「光郎格」にせよ、玄本の「各(格)広郎」にせよ、音値は同一で、「格」(各)は cây, 「光郎」(広郎)は quang-lang (桃榔の SV)を表わす。

230 石榴

喇大溜 (la ta liu)

thạch (SV) (đá) lựu (SV)

「喇大」に就ては No. 58 参照。「溜」は lựu (榴の SV)を表わす。本例の音註としては、「喇」(đá)は不必要であらう。Dict. は blai thêu lựu となす。

231 菱角

貌 (mau)

mao (SV)

菱角 (学名: stephania rotunda) は越語で âu, 仏語の châtaigne d'eau (又は tricère, mâcre) に当る。「貌」は âu の音とは合わず、恐らくは mao (茅の SV) に対する音註であらう。「茅」は水草の一種で、葦類をも含むから「菱角」を指すのであらう。

232 蓮花

山滑; (玄本) 花山

hoa (SV) sen

233 紅蓮

鐸山; (玄本) 花奪

sen dó

玄本の「花奪」は「山奪」の譌である。

234 白蓮

八山

sen bạch (SV)

235 (静本、倫本、河本、内本、近本) 紅花

鐸滑

hoa (SV) dó

本例は阿本と玄本では欠文となつている。

236 花開 滑麦; (玄本) 花兀 (hua u)

hoa (SV) nò.

諸本の「麦」は越語の動詞 nò. (開ける) を表わすが、本例の音註として「麦」を用いるのは直訳的な註音の仕方であつて適切ではない。實際的に云つて越語で「花が咲く」と云ふ動詞は nò. であるから、玄本の「兀」(AC nguat) はその音註と考えられる。「兀」は更に Nos. 247, 326 及び ngũa (馬) No. 321 及び nũa (半) No. 614, 615 及び lũa (火) の音註となつている。

237 花謝 滑靺

hoa (SV) lət

本例の「靺」を筆者はかつて roi と訳し、Gaspardone 氏は lət と訳された。按ずると roi は「落ちる」、「散る」義であり、これに反して lət はその variante の lət (nhət) と同しく「あせむ」、「しぼむ」、「弱まる」の義であるから、本例の「花謝」(花がしぼむ、枯れる) に適合する。「靺」(AC lak) は lət の音を表わすのに申分ない。玄本は本例で音註を欠く。

238 戴花 対滑; (玄本) 改調花

đôi hoa (SV)

「対」は đôi (戴く) を表わす。玄本の「調」は deo を表わすと思われるが、deo は「帯びる」意味で本例には適合しない。「改」は衍字であらう。

239 菓熟 拝尽 (EM pai tsian)
(MM pai tsin)

*blái (trái) chín

「尽」は本例及び No. 600 及び chín (熟する) を表わす。

240 山菓 内買; (倫本) 内買
(玄本) 谷買 (ku mai)

củ mai

「山菓」は即ち「山諸」の事で、越語では mai と称する、故に音註は「買」のみで充分用を達する。諸本が更に「内」

(núi 山) をあてたのは「山薬」と云う字面にとらわれた機械的な音註の充て方で実際に即しない。玄本の如く、「谷買」を音註にして *củ mài* と解した方が実際の語法にかなっている。「谷」は本例と No. 242 にて *củ* (塊茎又は球根の陪数詞) を表わす。

241 香草

耳: (内本、静本、河本、近本、倫本、玄本) 亨葛

cỏ hương (SV)

242 葡: (内本、倫本、玄本)

蘿蔔 六布: (玄本) 谷六布 (kủ hou pu)

củ la bắc (SV)

「六」は *la* (蘿の SV) / 「布」は *bắc* (蔔の SV) / 「谷」は No. 240 同様 *củ* (陪数詞) を表わす。「蘿蔔」は即ち「大根」のことである。Loureiro は *la bắc*, 近代越語は *củ cải* と称する。「六」は別に No. 243 にて *lộc* (芝麻) を表わし、「布」は別に No. 368 にて *búa* (斧) / No. 502 にて *vú* (乳房) を表わす。

243 芝麻

六共 (*liou kung*)

lộc vùng

「芝麻」は普通その SV を *chi ma*, 或は俗称 *lộc vùng* と称する。Dict. は *lô vùng* 又は *mè* と称する。音註の「六」(AC *liuk*) は *lộc* / 「共」は稍無理ではあるが、*vùng* を表わすものと見ねばならぬ。「共」は或は「奔」の誤伝であるかも知れない。

E 鳥 獸 門 (Nos. 244—305)

244 竜

弄: (玄本) 弄

long (SV)

「弄」(*luy*) は *long* (竜の SV) を表わすが、俗音は *rông* である。

245 虎

戸 (*xu*)

hó (SV)

「戸」は本例及び No. 297 にて *hó* (虎の SV) を表わす。俗称は *hùm* 又は *cạp* である。

246 象

翁威 (ưn uei); (玄本) 得昂

ông (SV) voi

「翁」は本例及び Nos. 285-288, 296, 387, 628 について ông (翁の SV; 男性第二、第三人称敬称) の音註となる。

「威」は本例と Nos. 246, 287, 288, 296, 628 について voi (象) を表わす。要するに「翁威」(ông voi) は象を呼ぶ敬称である。越南人は虎に対しても敬称を附して ông còp 又は ông ba mươi と称し、かゝる民間の風習は現今でも尚存している。諸本では「象」に対して一律に「翁威」をあてるが、玄本は本例で「得昂」、Nos. 285-286 及び「燈」、Nos. 287-288, 296 及び「相」、No. 628 では「威」を充て、頗る統一を欠く。この内、「燈」は tương (象の SV) の音註及び Nos. 285 (牙象)、286 (母象) の場合は妥当であるから別として、本文ではこの二例以外は一律に (翁) 「威」を採用する。玄本が本例に与えた音註「得昂」(tei an) は何のことかわからない。強いて云えば、この両字の反切で tương (象の SV) を表わさんとしたものか。「翁」は本例の外、No. 271 について ong (蜂)、No. 401 について ông (翁の SV; 祖父)、No. 615 について phông (放の SV)、No. 707 について uôn (灣、彎曲) の音註となつてゐる。

247 馬

厄; (玄本) 麻兀 (ma u)

mã (SV) ngựa

諸本では「厄」は本例及び Nos. 289-293, 298, 326, 380 について ngựa (馬の俗称) を表わしている。これに対して、玄本は本例で「麻兀」、Nos. 289, 290 及び「麻」、Nos. 291-293 及び「厄」、No. 298 及び「麻」、No. 326 及び「兀」、No. 380 について「麻」と云う風に、「兀」・「厄」・「麻」の三字を音註に使用している。この内、「麻」は明らかに mã (馬の SV) を表わしたのであるから、これを別として、俗語 ngựa を表わす音註としては「厄」(AC ek) よりも「兀」(AC nguat) の方が音韻的に近い。故に本文では玄本で「兀」をあてる語例では「兀」を音註に採用し、そうでない場合は「厄」又は「麻」に従つた。本例では「麻」と「兀」の両方を探り、mã ngựa と解した。つまり「馬」の総称の意味合いを持たせたのである。「麻」は本例及び No. 290 について mã (馬の SV) を表わしている。寛政訳語は「馬」に

「キヤウ」をあてる。これは *ngiua* 表わさんとしたものらしい。

248 牛 革蕪; (近本) 草蕪
(玄本) 跛 跛 (puo k'iu) *bò *klâu (trâu)*

近代越語で「黄牛」を指す語は *bò* であり、「水牛」は *trâu* であるが、*Dict.* では (con) *tlâu* となし、*Murong* 語では *lu, klu, plu* の諸形がある。*Maspéro* は曾て「蕪」を **tlâu* の音註と見なす (loc. cit., p. 3) 筆者は「革蕪」の両字が *tlâu* よりもこと古ら形の *klâu* を表わすとなし、*Gasparpone* 氏は同じ音註を使ひ、*con tlâu* と解したが、*trâu (tlâu, klâu)* は「水牛」の義であつて充分妥当な解釈とは云い難い。今各本の音註を按ずるに、玄本を除く六本は本例及び Nos. 294, 297 にて均しく「革蕪」(近本の「草」は「革」の誤伝)を充てるのに対して、玄本は本例で「跛 跛」をあて、Nos. 294, 299 の「牛」に対しては同じく「跛」をあてている。かかる註音の仕方を見ると、玄本は明らかに本例を「牛」の総称と見、「跛」を *bò* (黄牛)、「跛」(驅)を **klâu* (▷*trâu*; 水牛)を表わしたものと見ねばならぬ。「跛」(*k'iu*)の音値と *Murong* 語の *klu* の近似性を見れば、かかる解釈は無理でないことが了解出来よう。

249 羊 得; (玄本) 特 *dé*

250 犬 坐 (*tsuo*) *chó*

「坐」は本例と No. 300 にて *chó* (犬)を表わす。

251 猪 論 (*luan*) *lɔn*

「論」は *lɔn* (猪、豚)を表わす。

252 猫 眇 (*miau*); (倫本) 眇 *mieu* (SV)

音註は「眇」が正しく、本例で *mieu* (猫の SV) No. 315 及び *mieu* (廟の SV) を表わす。尚俗語では *méo* と称する。寛政訳語が「猫」を「マヤヲ」と訳するのは *méo* を表わしたものである。

253 鼠 卓 (tʃau)

chuôt

「卓」(AC tʃak) は chuôt を表わす。

254 鹿

侯 (xou);

(近本) 侯
(玄本)

hrou

「侯」(侯、喉同音) は本例で hrou (鹿) を表わし、別に No. 296 にて hó (吼) No. 697 にて hrou (右の SV) の音註となる。「鹿」は別に (con) nai' 又は lôc (鹿の SV) とも称する。

255 兔

托 (t'uo)

thó (SV)

「托」は thó (兔の SV) を表わす。

256 鷺

安 (an; AC'an)

ngông

「安」は本例及び No. 303 で ngông (鷺鳥) を表わし、別に No. 259 で anh (鷺) No. 380 で an (鞍の SV) No. 575 にて ǎn (食する) の音註となる。

257 鴨

惟 (EM vi
MM uei)

vit

「惟」は本例及び No. 674 にて vit (鴨) を表わす。寛政訳語は「ヒノ」とあつてゐる。これは vit を表わしたのであらう。

258 魚

嫁

cá

259 鶯

賚蚤; (近本) 賚蚤
(玄本) 安

anh

筆者は曾つて諸本の「賚(又は賚)」は「營」の譌で、「營蚤」を以て音註とし、「營」は anh (鶯)、「蚤」は vâng (黄)と解し、Gaspardone 氏は té man (意味不明)と解したが、斯かる苦しい解釈は幸にして玄本が救つてくれた。玄本の「安」は明らかに anh (うぐひす) を表わしたものである。

260 燕 晴; (倫本、静本、近本) 暗
(玄本) 煙 (ien)

yên (SV)

音註は「暗」又は「煙」が正しく、前者は *ên* (燕の俗名) を表わし、後者は *yên* (燕の SV) を表わす。本文では後者に従う。Gaspardone 氏は *rinh* (はじぶ) と解する。

261 雀 爵 (tsiau)

tước (SV)

「爵」(AC *tsiak*) は本例及び No. 282 として *tước* (雀の SV) を表わす。「雀」の俗名は (*chim*) *sé* である。
262 鶴 合 (*ko*; AC *ráp*)
cáp (SV)

「鶴」の俗名は (*chim*) *bó câu* である。寛政訳語は「ハツ」をあげる。*cáp* の対音でもあるか。Gaspardone 氏は *hap* と解するが、意味不明である。「合」の用例に就ては No. 225 参照。

263 蟲 搜 (*sou*); (玄本) 腫

sâu

「搜」は *sâu* (蟲、昆虫) を表わす。玄本の「腫」(*tjung*) は *trùng* (蟲の SV) を表わしたものである。本文では前者をとる。

264 犀 堆 (*tuai*); (玄本) 恚

tây

「犀」の越名は *tây* である。諸本の「堆」と玄本の「恚」(*t'oi*) は近音なれども、前者が無気音であるから、これを音註とせる。Gaspardone 氏は *té* と解するが、(*con*) *té* は穿山甲 (*pangolin*) の声母、「犀」(*rhinocéros*) とは異なる。「堆」は本例で *tây* を表わす外に、No. 275 の *đuôi* (尾)、No. 369 として *toi* (簞、*mô*)、No. 413 として *tôi* (奴僕)、No. 518 として *đuôi* (腿) の音註とせる。

265 麀 章 (*t'fiap*); (玄本) 張
chương (SV)

「章」(張は同音) は *chương* (麀の SV; 即ちの) を表わす。Gaspardone 氏は *trang* と解する。意味不明

である。

266 驢

勒

lũa

267 騾

喇：(玄本)刺

la

268 猴

棄 (玄本)文 (EM van / MM nan)

vuôn

日常越語で「ちる」は khi と称し、vuôn と称するが、厳密に云うと、前者は「猿」(singe) であり、後者は「猴」(gibbon) である。「猴」の方は体格が割方大きく、尾や四肢が長く、毛色も白色や黒色がある。本例の語義は「猴」であるから、音註は玄本の「文」を採用して vuôn とよんだ方が正しかろう。

269 豹

包 (pau)

báo (SV)

「包」は báo (豹の SV) を表わす。俗名は beo である。

270 獺

頼：(倫本)頼半 (玄本)大

rài

「頼」は rài (獺、かほうそ) を表わす。「獺」の SV は lai と thác と二読あるので、玄本の「大」は thác を表わさんとしたのであろう。尚、倫本の「半」は No. 272 の音註が混入したものである。

271 蜂

翁

ong

272 蝶

半

buôm

273 蚊：(倫本)蛟

梅

môui

倫本の「蛟」は「蚊」の筆誤である。

274 鬚

中：(玄本)申

chôm

玄本の「申」は「中」の筆誤である。

275 尾 堆; (玄本) 惟

đuôi

玄本の「惟」は「堆」の誤伝である。đuôi の字喃は「譚」に作り、声符に「堆」を採用している。

276 羽 弄; (玄本) 美

lông

277 毛 帽 (mau)

mao (SV)

「帽」は本例で mao (毛の SV) No. 505 で máu (血) を表わす。

278 爪 剝 (pau); (玄本) 罩

vuốt

「剝」(AC pāk) は本例で vuốt (爪) No. 659 にて bóc (卜の SV) を表わす。玄本の「罩」(tjiau) は tráo (爪の SV) を表わしたものである。近代越語では多く móng 又は móng vuốt (vút) と称する。

279 麟 蒙論 (mang luan); (玄本) 冷 (laj)

muông lân (SV)

諸本の「論」と玄本の「冷」は何れも lân (麟の SV) を表わすが、どっちかと云へば「冷」の方が比較的近いから、本例の音註としては諸本と玄本を折衷して、「蒙冷」とする。「蒙」が表わす音は muông (又は móng) で、この語は原来獅子・虎又は犬の幼小なる者、或は猛獸一般を指したのであるが、本例ではこれら動物の陪数詞となっている。

280 蝦 端 (EM ton / MM tuan)

tôm

「端」は tôm (蝦) を表わす。

281 蟹 蓋戈 (kai kuo)

gái (SV) cua

「蓋」は本例で gai (蟹の SV) Nos. 398, 408 にて cái (婦人) No. 421 にて ké (者) の音註となる。一方「戈」は cua (蟹の俗名) を表わす。この様に一つの名詞に対して越読と俗名を列挙する例は既に No. 58 (石—喇大) 及び No. 248 (牛—跛馱) に見えている。

282 孔雀

空罽 (k'up tsiau); (近本) 高阿

không (SV) tước (SV)

近代越語で普通孔雀は con công と称する。近本の「高阿」はその他の六本では均しく No. 284 「叫鴉」の音註となっている。按ずるに近本には「叫鴉」の条が欠けているので、筆写の際本例の音註と混同したのであろう。

283 狐狸

蒙離; (近本) 欠文
(玄本) 何離

hó (SV) li (SV)

諸本の「離」は li (狸のSV) を表わし、「蒙」は No. 297 と同じく muông (動物の陪数詞) の音註であるから、「蒙離」は muông li と読める。併し muông li では「狸」の意味しかなく、而も越語で普通「狐狸」と云えば「狐」(renard) を指すことが多いので、本例は玄本に従い、「何離」(離) を以て hó li (狐狸のSV) を表わしたと見た方が妥当であろう。Gaspardone 氏は音註を「蒙禽」として mông chim と解する。意味不明である。

284 叫鴉

高阿 (kau a); (近本) 欠文
(玄本) 告阿

ác kêu

「高」(玄本の「告」は同音) は本例で kêu (叫ぶ) を表わし、「阿」は ác (鴉、からす) を表わす。(鴉のSVは nha)。但し、「叫鴉」なる鳥名はないから、本例の音註は「鴉叫」が正しく、ác kêu と解すべきであろう。

285 牙象

生翁; (倫本、静本、近本) 生翁威
(玄本) 燈牙 (taj ia)

tượng (SV) ngà

諸本の「生」は sùng (動物の牙又は角) を表わし、又「翁威」は象に対する敬称 ông voi であることは No. 246 で述べた。併し本例の「牙象」は「牙のある象」のことであるから、玄本の「燈牙」を音註として、「燈」は tượng (象のSV)、「牙」(AC nga) は ngà (象牙) を表わすものと解した方が妥当であろう。「燈」は No. 286 についても同音を表わし、「牙」は別に Nos. 611, 712 にて nhỏ (細い、小さい) を表わす。Gaspardone 氏は本例を ông voi sinh と解せられた。これでは意味がはつきりしない。

286 母象

乜翁威; (玄本) 毛燈 (mau taj)

mẫu (SV) tượng (SV)

諸本の「七翁威」は極めて直訳的な註音であつて、これに反して、玄本の「毛」は *mâu* (母の SV)、「燈」は *tuông* (象の SV) を表わす。

287 象鼻 翁威梅；(玄本) 相即

múi (ông) voi

玄本の「相」は前例で *tuông* (象の SV) に対して「燈」が音註として用いられているのを見ると、これで以て再び象の SV を表わすとは思われない。強いて云えば **suông (tuông)* の如き音でも表わさんとしたものか？ 次に「即」は *ti* (鼻の SV) を表わすのであろうか、本例では慎重を期して、諸本に従つて *múi (ông) voi* と解しておく。

288 象牙 翁威生；(玄本) 相阿

sùng (ông) voi

玄本の「阿」は *nha* (牙の SV) を表わし、「相阿」で **suông (tuông) nha* (象牙の SV) を表わすらしいが、ここでは上例と同様 *sùng (ông) voi* と解しておく。近代越語で「象牙」は単に *ngà* 又は *ngà voi* と称する。

289 兒馬 勒厄；(玄本) 記麻

*ngư'a *tlai (trai)*

諸本は漢語の「兒」に対しては均しく「勒」を音註となしている (No. 227 棗兒—頼勒、No. 399 姪兒—照勒)。その表現せんとする音は **tlai (trai, giai)*；男の子又は動物の幼小なるものを描いて外になら (G. Hué, p. 1044)。一方、「厄」は本例及び Nos. 291-293, 298, 380 として *ngư'a* (馬) を表わす。玄本の「記」は或は *tré* (若) を表わすかも知れないが、本例では諸本に従うことにする。Gaspardone 氏は本例を *ngư'a đực* (雄馬) と解する。

290 馬駒 厄孤；(玄本) 麻孤 (*ma ku*)

mã (SV) câu (SV)

「孤」は *câu* (駒の SV) を表わす。Gaspardone 氏は *câu ngư'a* と解する。

291 青馬 蒼厄

ngư'a xanh

292 白馬 八厄

ngư'a bạch (SV)

293 黒馬 忍厄

ngũ'a den

294 黄牛 (倫本) 欠文
(玄本) 跛陷

bò vãng

音註は玄本の「跛陷」が正しく、bò vãng を表わす。Gaspardone 氏は con trâu vãng と解するが、これでは「黄色い水牛」の義になつてしまふ。

295 蜘蛛 知主 (tʃi tʃiu)

tri (SV) tru (SV)

「知」は本例で tri (蜘蛛の SV) を表わす。「主」は本例で tru (蛛の SV) を表わし、別に No. 320 に tru (厨の SV) No. 514 に chu (珠の SV) No. 642 に chàu (殊の SV) の音註となる。蜘蛛の俗称は普通 (con) nhện である。Gaspardone 氏は tri chủ と解する。

296 象吼

(倫本) 欠文
(玄本) 相候

(ông) voi hò

諸本は「叫」(Nos. 284, 299), 「吼」(Nos. 296, 297), 「啼」(No. 301) の諸語に対して一律に「高」をあらわす、kêu と読ませている。併し実際の越語ではこれらの三語を区別している。玄本はこの点に着目して、No. 284 に「告」、No. 299 に「改」、No. 297 に「喉」、No. 301 に「教」、本例に「候」を夫々あてているが、その解釈が仲々難しい。本例では「象」に対する音註としては「(翁)威」、 「吼」に対する音註としては「候」(xo) を採用して、(ông) voi hò と解した。hò は G. Hué の辞典 (p. 388) によれば動物の「吼声」(rugissement) であるが、近代越語で「象が吼える」は普通 voi rông 又は voi ré といい、

297 虎吼

戸高; (玄本) 戸喉 (xu xou)

hò (SV) hãm (SV)

上例と同じ理由で、玄本の「戸喉」を音註に採用し、「戸」は hò (虎の SV)、「喉」は hãm (鬪の SV) を表わすと解する。Gustave Hué によれば hãm は「虎の吼声」(rugissement du tigre) である。近代越語では hò gãm と

も称する。

298 馬嘶 厄得； (倫本) 欠文
(玄本) 麻得

ngũa thét

近代越語で馬が「嘶く」に相当する語は hi 又は hét であつて、この両語とも音註の「得」とは合わない。筆者は曾つて「得」を ré と解し、Gaspardone 氏は thét と解した。この両語とも「大声に叫ぶ」義であり、近代越語では動物の鳴声に用いられないが、thét の方が音註の「得」(AC tek) に近いから、これを採ることにする。

299 牛叫 革蔓高； (玄本) 跛改 (puo kai)

bò kên

本例の音註としては玄本と諸本を折半して、「跛高」とし、bò kên と解する。玄本の「改」は如何なる音を表わすか不明である。

300 犬吠 坐束 (t'su su)； (倫本) 欠文
(玄本) 坐喉

chó súa

「束」は本例で súa (吠える) を表わし、別に No. 529 にて sôt (焦慮する) の音註となる。玄本の「喉」(hâm) は犬の吠える場合には妥当しない。

301 鶏啼； (玄本) 鶏鳴 賈高； (内本、近本、倫本、静本、河本) 賈高
(玄本) 嫁教 gâ kên

音註は「賈高」(ka kau) が正しく、これで gâ kên を表わす。近代越語では普通 gâ gáy と称する。

302 雉鶏 止賈 (t'si ka)； (倫本) 欠文
(近本) 止売 gâ tri (SV)

音註は「賈止」が正しく、「止」は tri (雉の SV) を表わす。Gaspardone 氏は gâ trê と解する。

303 天鷲 雷安； (玄本) 天鷲 ngông *blò'i (trò'i)

玄本の「天鷲」(t'ien au) は thiên nga (天鷲の SV) を表わすのであろう。

304 鯉魚 愛嫁 (ai ka)； (倫本) 欠文
(玄本) 利賈 cá gáy

越語で「鯉魚」は *cá chép* 又は *cá gáy* と称する。「愛」は本例で *gáy* を表わし、別に Nos. 400, 413 に *gai* (女兒) の音註となる。玄本の「利賈」は *cá h* (鯉の SV) を表わすのである。

305 白魚 八嫁 (玄本) 賈八 *cá bach* (SV)

玄本の「賈八」は諸本の「八嫁」と音値が同一であり、語順が正しい。